

セミナー： 等身大の日本の姿を見つめる②

～「出る杭」を育てる教育と受容する社会～

講師：黒川 清

(東京大学・政策研究大学院大学 名誉教授・東海大学特別荣誉教授・元日本学術会議会長)

2023年3月28日(火)

三 翠 園



公益社団法人 高知県自治研究センター



(司会)

皆さん、こんにちは。定刻になりましたので、ただいまから高知県自治研究センター主催のセミナーを開催したいと思います。

私は本日の進行を担当させていただきます

自主研究センターの石川と申します。どうかよろしくお願いいたします。

本日のセミナーは、「等身大の日本の姿を見つめる」というタイトルの連続セミナーでありまして、今日が第2回目となります。

それで、今日が初めてという方もいらっしゃるかもしれませんが、この企画をした経緯と問題意識について、少し最初にお話をさせていただきますと思います。

よく最近、失われた30年ということが言われます。これは経済指標だけではなくて、各種統計の数字などを国際比較したときに、日本の位置が非常に下がってきていると。指標によってはもはや日本は先進国とは言えないのではないかといった、そういった指標も散見されるようになってきました。

たとえばこの30年、賃金も上がっておりませんし、OECD 諸国の中で日本だけが賃金が上がっておりません。一人当たり GDP も、去年は台湾に抜かれ、今年には韓国にも抜かれると、そんなことも言われて

います。そういった、この長期間の日本の国力の低下、日本の相対的な沈下ということが、やっと報道もされるようになってきました。

そういったことで、私たちとしては、見たくないものは見ないということではなくて、やはり現実を直視する中でありのままの等身大の日本というものをきちんと見つめて、そのうえで処方箋なり課題なりを改めて自分たちで見つけていこうと、そういった趣旨でこの連続セミナーを開催をしているところです。

第1回目は、去年の9月に神奈川県立保健福祉大学の兪 炳匡（ユウヘイキョウ）教授に、「各経済指標から見える日本の立ち位置と処方箋」というタイトルで講演を行っていただきました。

本日は第2回ということで、高等教育のあり方をテーマに黒川清先生にお話をいただきます。黒川先生について、若干ご紹介をさせていただきますと、東京大学、東海大学、そして UCLA など教鞭を執られて、日本学術会議の会長であるとか、福島原発事故についての国会事故調の委員長など、さまざまな要職を歴任されていらっしゃる方です。

黒川先生にお願いしたのは、こういった長期に沈みつつある日本を建て直すためには、やはりそれは人材を育てるというのが必要なのではないかと。そのための高等教育のあり方はどういうことなのかということで、「出る杭」を育てる、そのための教育についてお話をいただきたいということで、今日をお願いをしたところです。

それでは黒川先生、早速ですがよろしくお願いいたします。



セミナー：等身大の日本の姿を見つめる②

～「出る杭」を育てる教育と受容する社会～

黒川 清

東京大学・政策研究大学院大学 名誉教授

東海大学特別荣誉教授

元日本学術会議会長



プロローグ

(黒川)

ありがとうございます。いや、実はですね、確かに今言われるとおりになんですね。何となく日本も元気がない。昔は『ジャパン・アズ・ナンバーワン』なんて言われて、確かにGDPもものすごく伸びて、多分1980年代の終わり頃、まだ若い人が生まれる前ですけれども、そのときには、世界全部のGDPのうち、日本が十数%も占めていたんですよ。

日本はものすごくいいところまで行って、その後駄目になり始めたのがいつなのかっていうと、1980年代の終わりですね。つまり1970年代までは戦後の調子がうまく行って、エズラ・ヴォーゲルというハーバードの学者が、その頃『ジャパン・アズ・ナンバーワン』という本を書きました。もちろんこれは英語で書いてあるわけですが、その日本語訳が日本でばか売れしたんです。

どういう内容かという、日本の企業のあり方とか人間のあり方が非常にまじめで素直で、しかもGDPがどんどん増えてくるという話で、日本はこのディシプリン（訓練・規律）と、こういう日本人のまじめさから言うと、いずれ日本はナンバーワンになるのではないかとこのポテンシャルがあるよという本を書いたんです。

エズラ・ヴォーゲルという人は元々中国の専門家なので、ハーバード大学にいてしょっちゅう中国に行っていたわけですが、これが1980年になる前の60年とか70年あたりですけれども、そのうち日本が成長し始めたので、「おや、日本は結構面白いかもし

れない」と言って、1970年代に入って、5年ほど日本におられまして、日本のいろんな人に話を聞いて、あの『ジャパン・アズ・ナンバーワン』という本を書いたわけです。

戦後世界の大きな枠組み (民主主義と共産主義)のはざままで

実際日本はどんどんGDPが増えたわけですが、なぜ増えたんでしょうか。これよく考えてくださいね。日本人は勤勉だし、言われたことをきちんとするし、どういうもので日本が成長していったかという、そのとき、皆さんご存じだと思うんですけど、戦争が終わって日本が負けた後、世界はどういう世界だったでしょうか。

つまり、こういう大きな枠組みということをもっと考えるということはすごく大事なんです。日本はボロ負けしました。その後何が起こったかという、ちょうど民主主義と共産主義の戦いという枠組みになりましたね。覚えていると思いますが、それは何かと言うと、大きな西洋つまりアメリカを中心とした北アメリカとそれからヨーロッパの民主主義の国々と、それから共産主義の国、つまりあの頃のソ連邦と、新しい中国ということで2つの大きなぶつかり合い、つまり民主主義と共産主義のぶつかり合いということが、第二次大戦の後に起こり始めたわけです。

日本は負けたおかげでと言っちゃあおかしいんですけど、戦争が終わるまで日本が占領していた朝鮮半島からも引き揚げました。何が起こったかとい

うと、冷戦の枠組みになりまして、民主主義と共産主義がぶつかり合うということになるわけです。

戦争に負けたのは日本とドイツとイタリアですけども、ドイツは東ドイツ、西ドイツに分けられて、ベルリンがその両方のぶつかり合いのその不穏な地区となっているわけですから、1つのドイツが2つに分けられちゃったんですね、負けたせいで。日本はそれがなかったんですけれども、朝鮮半島からは引き揚げるということをしたのが日本だったわけです。

日本はほんとにあのときひどくて、皆さんもちろんまだ生まれておられないですけども、私はそのとき小学校の3年生とか4年生でした。だから戦争の怖さも知っています。家の中に防空壕がちゃんと掘ってあって、東京大空襲もありまして東京も結構燃えたんですけど、そういうときにはちゃんと自分の家の庭、その庭といっても100坪ぐらいのところは結構あって、当時は人間はそれほど多くないので、東京の真ん中でも結構自分の家、みんな庭がありましたから、その中に隠れてました。

そういうことを実際に知っている人は、もう非常に少なくなっています。少なくとも75歳以上の人じゃないと、実際に空襲警報が鳴るようなことは知らないと思いますけど、特に沖縄の人は非常にひどい目に遭いました。沖縄のおじいちゃん、おばあちゃんとか、おじいさんとおばあちゃんと一緒に暮らしていたような70歳以上とか60歳以上の方は、子どもでもその悲惨なところを知っているはずですよ。

しかも沖縄では、空襲でやられた部分もありますが、実際に陸戦でアメリカ兵がどんどん南へ南へと来るわけですので、沖縄の古い人たちに聞くと、ほんとにあれはかわいそうだと思いますね。もう明日戦車が来るぞと分かっている、実際に戦車が来るわ



けです。日本は戦車もないので、どんどん人が殺されていくわけです。それで最終的には、みんな現地の人たちは南のほうで、身を投げて死ぬようなことがあるわけです。そういうことをまだ体験したことが少しでもある人たちに話を聞くと、あのじわじわと明日来るぞという、陸上で来るという恐ろしさ。この戦争でたくさんの人たちが殺されたということは、ほんとにすごい大変だと思います。

戦後、日本の成長期のかげに朝鮮戦争

それで、戦後は日本は非常に調子よく、アメリカの占領下でうまく行ったわけです。なぜうまく行ったのでしょうか。これは、さっき言ったように民主主義というアメリカ、ヨーロッパと、共産主義という中国とそれからソ連との戦いの構図で朝鮮戦争が起こったわけです。つまり日本が引き揚げたあとの朝鮮半島で共産主義の国の中国と、それから日本じゃないけどアメリカ軍が戦うわけですよ。その結果どうなったかと言うと、今、北朝鮮と韓国（南朝鮮）に分かれちゃったということで朝鮮の人たちというのはほんとにひどい目に遭って、まだ一緒になれないということがずっと続いているわけです。

私は実はあるときにホウ先生という、そのときの南の人ですけども、その人が見つけたウイルスがあるんですけど、ハンタウイルスというんですけど、その方がちょうど私が学会の会長になった頃、1980年代ですけど、これが慢性の肺の病気にも関係あるんじゃないかって一時はそういうのもあったので、その先生のところに行きました。

ちょうど学会の会長になった頃だったので、向こうの韓国のナショナルアカデミートップがその先生だったので、先生に会いに行ってお話もしたんですけど、あなたは新しいウイルスを見つけて、もうほんとに私が尊敬する研究者の一人なんだっていう話をしに行ったんです。そしたらその先生が大歓迎をしてくれて、いろんなお話をして、それから何回か韓国のそういう学者の先生たちとお話をして、日韓のこともやりましたけども、そのときその先生が言ったことが強く印象に残っています。

私より年上で、もう90歳過ぎてもう亡くなりましたけども、「私が死ぬまでにどうしてもしたいこと

があるんだ。「何ですか」と言ったら、「どうしてもお母さんに会いたいんだ。お母さんがまだ生きていることは知っているんだ」と。「どうして会えないんだ」って言ったら、「お母さん、北朝鮮にいるんですよ」と。だから、そういう悲劇ね。だから北と南の朝鮮と両方に分かれたので、親子が死ぬまで会えない。「どうしてもお母さんだけには会いたい」って言っていたような悲劇がお隣の朝鮮半島では起こって、今だに続いているんだということを、皆さんのぐらいいったことがありますがってことなんですよ。

だから私は、日本はすごくうまく行ったのはなぜかと言うと、朝鮮半島で戦争が起こったからこそ、やっぱり日本がアメリカの基地のトップのベースになって朝鮮半島を戦っていたわけです。その日本が引き揚げた朝鮮半島では、北朝鮮と南朝鮮、韓国でまだ1つになれてないじゃないですか。これが第二次大戦の日米の戦争の結果で、朝鮮半島に起こったことなんです。ということをごのぐらいい日本人たちは感じているのかなということをお私に言いたくて、時々こういう話をしています。お隣でほんと日本に、日本の植民地だったのがこんなことがあってまだ1つになれない。この悲劇というのは、ほんとにそういう人たちがいたんだなあということをおぜひ考えてほしいと思います。

日本の成長期、徐々に増える 大学進学率や留学

それで1970年代の終わり頃からたくさんの方の大学の人たちがアメリカに留学する人が増えてきました。私の場合、アメリカに行ったのは1960年代の終わりです。あと医学博士になりまして、その後ポスドク（ポストドクターの略。博士号を取得し、大学院を卒業してから任期付きの研究職に就く人。博士研究員）というポストができておりました、そこに2、3年行ってみんな帰ってくるという人がほとんどでした。

ところが、私は内科の専門なんですけど、その後、内科だと日本はみんな医学博士を取りますから、大学院にも行って、私はその後ポスドクとしてペンシルベニア大学に行きました。そのときの研究は、腎

臓の研究をしていたんですけども、当時は腎臓の画期的なものは人工透析という人工腎臓ですね、人工透析というのがアメリカから始まって、私も先生から「最近、人工腎臓というのがあるんだけど、あなたはそれの研究をしてはどうですか」と言われたので、それを早速調べ始めたんですが、その頃ようやくと医学部のライブラリーができて始めるということが起こります。

これはロックフェラーのおかげでできるんですけど、それでそういうジャーナルを買える人というのは一部の先生だけですね。ですから、教授のところに行って見せてもらって本を読ませてもらったりしたんですが、それでその人工腎臓ということは何か分かったので、それを始めるために日本には何もないので私は、ちょうどアメリカの基地の病院があるわけですね。立川にアメリカの基地がありますので、病気になる人もいますので、小さな病院とそれからお医者さんがいました。

何でその頃にあったかということ、朝鮮半島の後に、またその共産党と民主主義のぶつかり合いが起こったのがベトナムでした。ベトナム戦争ですよ。朝鮮半島の後はベトナムでまた戦争が続いてるわけです。ベトナムの戦争に行くのはもちろん、アメリカ兵がどんどん行くわけで、ベトナムに飛行機を飛ばすためにはどこを基地にするかということ、1つは立川にある基地とそれから何か所か日本に基地がありますが、もう一つはフィリピンですね。そういうところを基地にして、ベトナムに飛行機を飛ばして兵隊が行って、これは長い戦争になって、結局戦争が終わるのは1972年ぐらいだったと思いますが、これは北ベトナムの勝ちということで、アメリカは負けるわけです。

その頃に、私はまだアメリカにいました。最初ペンシルベニア大学に2年いて研究をさせてもらいました。多くの日本人がいわゆる博士を取った後、ポスドクというところでアメリカに行って、2、3年行って帰ってきました。このポスドクという制度も、戦後のアメリカでできた制度です。

何でそんな制度ができたかと言うと、まだ日本はアメリカの占領下ですが、冷戦になったので多くの方がアメリカに行った理由は、1つは大学に行く人が増えたということなんです。昭和20年、戦争に負けた

頃に、日本はどのぐらいの人が大学に行っていたと思いますか。昭和20年では、日本の18歳人口、どのぐらい大学へ行った人があるかというところ3%ぐらいです。たった3%ぐらいの人しか大学へ行かないんですよ。

ところが、今どのぐらいか。そのうち日本は成長してきて、いわゆる1960年、戦争から15年経った頃には、オリンピックを日本に持って来るという話が決まります。それが1960年ぐらいに決まって、64年に東京オリンピックが始まるわけですが、その1960年頃は、日本の大学進学率は大体10%です。大体10%の人が大学へ行くというのは、それだけの大学をつくるわけです。だから、大学も増えるわけです。

その4年後にオリンピックをやります。だから、どんどん日本は経済成長して調子よかったんです。一方で朝鮮半島では相変わらず戦争をして、その頃には一応停戦ということで激しい戦闘は終わっているわけですが、今もまだ南北に分かれてまだ一緒になれないという、日本が引き揚げた後の朝鮮は非常にひどい目に遭っています。そういうことをみなさんにもどうか知ってほしいと思います。

隣だったんですよ。しかも日本が占領していたんです。日本が引き揚げた後でこの悲劇が起こって、その後ベトナムで戦争があって、日本はアメリカの先端の基地としてずっといたわけですから、それで日本にはアメリカの物がたくさん入ってきて、ラジオだ、テレビだ、Wi-Fiだとかいろいろなものが入ってきて、そういうもの、たくさん工業製品が日本に入ってくると、日本はそれをつくるのがうまいんですよ。そういうもの、つくったものを軽くちっちゃく薄くするというのは日本人が得意なところで、それがまたアメリカ人がどんどん来るのでばか売れるんです。

日本はこんなに小さくした、こんなに薄くしたということで猛烈に売れて、形のあるものを真似してつくるのはすごくうまいので、カメラなんかものすごくいいのがどんどんできるわけです。それをアメリカの兵隊さんたちとか軍人がどんどん買ってくれるということで、日本が高度成長したんです。

つまり日本の高度成長は、自由主義と共産主義のぶつかり合いの、まだ半分に分かれたままの朝鮮半島、その後のベトナム戦争、そういうがあるので、

日本はアメリカからいろいろなものが来て、アメリカ兵が来るので、それで日本は大成功して、日本のつくったものは素晴らしいよねと言って、アメリカがどんどん買うようになったという背景があったということをよく認識してくださいね。そういう日本の繁栄の陰にはその犠牲になった人たちが周りにどれだけいるかということも、認識していることはすごく大事だと思っています。

そうするうちに大学の進学率も高くなってくるんですね。昭和の20年、戦争が終わった頃は、日本の18歳人口の3%ぐらいしか大学へ行っていなかった。

最近どのぐらいになっているか、知っていますか。2000年にはどのぐらいになったかということ、日本の大学進学率は大体50%になっていて、それに見合うだけの大学ができています。私立大学、公立大学もそうです。

何でそんなに多くなっちゃったのかということ、それはアメリカでも大学がどんどん増えていったからです。つまりアメリカと同じようなことをして、うまく行っていた日本ということ。そういうことは、どのぐらいみんな意識しているのかなと思うんですよ。日本はほんとに独立しているのかなということ、完全な独立した国にはまだなっていないと思います。つまり、大きなことはアメリカがオクケーしないとできないという、下田会議以来の状態はまだ続いているように思われまして、まあ役所の人は知っていますし、そういうことはあまり書きませんが、完全な独立した国家にはまだなっていないんだということが考えられています。私あまりそんなこと言いたくないんですけど、今でも大事なことを決めるときには、アメリカがオクケーすることが前提ということになっているんじゃないかなと思います。

日本の経済成長の終焉

だけど、日本の経済成長が止まっちゃったのはいつ頃だと思いますか。大体1980年代ですね。何が起こったんでしょうか。まず第1に、ベトナム戦争が終わったということがあります。そして東西の冷戦がなくなったわけです。最終的にソ連の方からそれをもうやめましょうというそのテンションがソ連とアメリカの間でできて、今のところは一応は取まっ

ていて、完全にはなっていませんけど、少なくとも冷戦というテンションはものすごい高いところはなくなったですね。

日本が完全に降参したのは、もちろん広島・長崎の原爆の話がありますし、アメリカもとんでもないことをしたと思いますけれども、その後、今度原発を1970年代にアメリカで、これは結構発電にも使えると言って作り出したときに、日本もそれを真似するわけです。

それはなぜかと言えば、人口も増え、大きな戦争がなくなって、東西のぶつかり合いも戦争はなくなりつつあって、それで非常に平和で成長したパックス・アメリカナというような話がずっと続いていたわけです。その間に日本もその下請けではありませんが、アメリカが好きになるようなすごくいいものをたくさん作った。それが日本の成功物語だったわけですよ。

ところが、いつから変わったかといえば、それは私の考えでは、冷戦構造が終わった、つまりドイツでも、東西のベルリンが1つになって、冷戦が終わったという東西がなくなったのは1980年代の終わりですけれども、それからはグローバル時代になったわけです。

その頃に何でグローバル時代になったかって、1つはコンピュータです。コンピュータというものはもちろん軍事でできたところもありますが、コンピュータを使うことはいいんですが、なかなか普通の人には使えなかったんですけども、コンピュータがつながって、皆さんが最初コンピュータに触りだしたのは1970年代の終わりだと思いますが、そのときに出たものが、知っているかな、難しいのはいろいろあると思うんだけど Apple II ということですね、アップル。

UCLA 教授から帰国へ

アメリカではみんなポストドクで2、3年行っていたんですよ、日本の人がたくさん。私も同じようにポストドクで行ったんですけど、何かアメリカが楽しくなっちゃって、カリフォルニア大学に行ってそこでまた面白いので、楽しいので、そのままいることにしちゃった。日本はルールとして3年、4年以上

いると、基本的には元のポストには帰れないということになっていました。

そういうときにどう決めるかっていうのが人間大事なんだけど、私はいることになってしまったので、だけど競争相手は、30代の半ばぐらいの若いお医者さんです。この人たちと競争するという話で見ると、向こうももちろん移民が多いんですけど、まずカリフォルニアの医師の免許を取らなくちゃいけない。

向こうから移民も来るので、こういうふうにしたら取れるよっていうことをみんな教えてくれるので、いろいろ調べて、結局カリフォルニアのライセンスの試験を受けに行きました。そうするとようやく一人前の医者として競争できるわけですが、調べてみるとカリフォルニア州、あそこは州ですから、カリフォルニアとニューヨークとフロリダの医師の免許は非常に難しいということが分かりました。なぜかということ、お金持ちのお客さんが多いので、向こうは州制ですからね、だからそこのお医者さんはやっぱり難しいですよ、みんな来なくなるから。

でも、おかげさまでその試験には受かって、受かると1年間インターンやらなくちゃいけないです。やっぱり臨床できなくちゃいけませんから。それもその病院でやらせてもらって、その後は今度、私は内科の専門医でしたから、だから内科の専門医制度というのがアメリカにはあるんですね。だからそれも受けなくちゃならなくて、カリフォルニア州は結構厳しいので3日間の試験なんです。

その3日間の試験も一応受かりまして、ちょうど1972年ぐらいですけど、私は腎臓を専攻していましたから、腎臓の専攻というのはその頃アメリカでもできて、これは内科の専門医は持ってなきゃ駄目なんですけど、それもだからできたので受けました。

というわけで、フルに免許のそこにいる権利ももらったし、アメリカの人間ではありませんけど、その移民の資格をもらって、カリフォルニアの大学のスタッフにもなり、その資格も取り、専門医にもなり、腎臓の専門医になりっていうように、病院を3つぐらい、向こうはどんどん病院にいろんなところへ、良くなると引っ張られますから3回移って、それで UCLA の教授になって、UCLA には大きな病院が4つあるんですけども、そのうちの1つの腎臓

のチーフになって、結構もう十何年住んで、子ども2人目もつくってハッピーだと思っていた。

なのですが、突然東大の教授にならないかみたいな話も出てきたんですけども、東大を選ぶのもそうですけど、教授会で一応選挙をして、キャンディデート（立候補者、志願者）をやって、みんな教授会で投票しますからね。私は1位で、だからノミネートされたんですけど、結局教授会全部で選びますから負けました。そんな時に私の恩師の1人が日本からロサンゼルスまで来られて、「これからおまえが必要だから、私のところの助教授があいたから、もう何が何でも帰ってこい」って言われたので、私帰ることにしました。

ちょっと残念でしたね。と言うのもその頃は普通の大学の先生としてやっていて、ちょっと山越えもそうですけども車で20、30分で行けるところなので、そこに家を買ってプールも付いているし、ああ大学の先生でこんなところに住めるんだって非常にハッピーだったんです。

ジャクソン5ってグループがありましたよね。あのマイケル・ジャクソンがいるところ。ジャクソン5は解散しちゃったんですが。一番若いマイケル・

ジャクソンがうちの近所に引っ越してきました。だから彼に、近所にあるスーパーマーケットで何回か会いましたけど、まだ13歳から14歳ぐらいかな、一番の下の子だから。そういう人たちも買って住んでいるような家が、うちの近所だから、相当いい場所だって分かるでしょう。

今後の日本に必要な次世代の教育

そんなことで日本の助教授で帰ってきましたけども、何年か後に私が本当にしたくなったのは、やっぱり次の世代のお医者さんを育てる教育というのが一番大事だなと思って、一生懸命やれることをやりました。

あの頃、東大は60歳で定年なんですけど、定年になる前に、私いろんなこと発言していたし、アメリカの医学制度のことなども、そういう話もたくさんしていました。学会でもしゃべっていたし、いろんな学会の委員長もやらせてもらいましたけど、なぜかびっくりしたことに、東海大学が医学部長として来ませんかという話を定年の1年前に言われまして、私その頃、東海大学もアメリカもそうでしたけど医



学部が、ものすごく医学教育が変わり始めたときでしたから、私もいろいろそういう話をしていたので、呼ばれたのでほんとに嬉しくて移ることにしました。移ってから医学部の改革とか、アメリカの改革とか、いろんなことに沿ったようなことをやることができるとほんとに嬉しかったと思います。

そうやっているうちに、私の発言も結構皆さんが分かるようになってきてというか、学術会議のメンバーなんかもさせていただいて、これもまた調べてみると、アメリカのナショナルアカデミーの真似したんだなということがすぐ分かってきて、そんなことを発言しているうちに「学術会議の会長になりなさい」なんて言われちゃって、そのときは学術会議の性格なども分かっていたので引き受けることにして、それでいろいろなことをまたやりました。

「規制の虜」で失敗から 学ばない国、日本

そんなことをやっているうちに12年前、2011年に福島事故が起きたわけですよ。あのとき、みんなほんとに大変だったと思います。皆さんは何してました、あの頃。あの頃、私は、既にネットの時代でしたから、どんどんネットをフォローしていると何があるかということ、日本の政府が、この福島で何が起きて何をやっていろんなことを言っていますよ。だけど今ではそんなことをやっても、みんなすぐに英語で分かっちゃいますから。

それであの頃は、原発はグローバル・ウォーミング（地球温暖化）などがあって、非常に増やさなくちゃいけないというので、世界中で400基ぐらいありました。中国でも幾つもつくってました。日本でも50基ぐらいありました。どんどん増えていたんです。でも日本で事故が起こったということは、日本みたいな工業製品とかものづくりが非常に素晴らしい国で、あんなことが起こったということには世界中がびっくりしたと思いますけども、もうネットの時代ですので、世界のエキスパートは何を言っているかが分かっちゃったんですね。

それで私は、議員先生のところにも行ったし官邸にも行って、こういうときはもう世界中に分かっちゃっているんだから、世界の人たち、エキスパート

を集めた検証委員会をつくなくちゃいけないということはずっと言っていたんです。言っていたんだけど、なかなかうまく行きませんでした。だけど、あれが一応収まったときに官邸から呼ばれて、今度福島で何が起こったのかというのをちゃんと検証するという委員会をつくることを立法府で決めたと。ついては、あなたがその委員長でこの10人でやってくれと言われました。

それは嬉しかったんですけど、だけどやり方は世界中が見ているわけですから、委員会での私の条件は、委員会をいつどこでやるということ全部ネットでアナウンスすること。ですから世界でも見えるようにしていたわけですよ。そしてその委員会は完全にネットで公開をして、しかも日本語でしゃべっていますが、英語の同時通訳も入れること。だから世界中で、何をしゃべっているかって全部発信していましたから、それで大体6カ月って言われてたので6カ月で終わりました。

それでやっているうちに気がついたのは、「規制の虜」（規制する側＜経産省原子力安全・保安院や原子力安全委員会など＞が、規制される側＜東京電力などの電力会社＞に取り込まれ、本来の役割を果たさないことを意味する。その結果「日本の原発ではシビアアクシデント＜過酷事故＞は起こらない」という虚構が罷り通ることとなったのである＜黒川清著：「規制の虜」より＞）ということですよ。「規制の虜」ってコンセプトがあることは分かったんですが、政府が無責任に原子力発電所の運転をやっていたんですよ。つまり、世界はどんどん変わっていたんですけど、しかもその頃、世界は冷戦の後にテロとかいろんなことがありました。9.11のテロもありましたので、これがやっぱり起こったということは非常に大事な問題で、原子力発電はいい目標となっちゃうわけですよ、テロリストにしてみれば。それをちゃんと守ってなかったんですね。

「規制の虜」というキーワードがあるということが分かりまして、つまり政府は、電力会社とかいろんなものが、きちんとやっているかということをチェックする責任があるんですよ。そのチェックをちゃんとやってないということが分かったので、「規制の虜」ということになっているんだと。この「規制の虜」というコンセプトは、政府は産業界がやっ

ていることをきちんとルールに合わせることの責任があるということです。それをやってなかった。つまり、原発のルールというのは、世界のすう勢はどんどん厳しくなっていったんだけど、日本はちゃんとやってなかったということです。

「規制の虜」というのは元々はジョージ・ステイグラールという人が考えた、経済学者の説ですけど、そういう政府の失敗というコンセプトで彼はノーベル経済学賞をもらっています。日本はそうだったんだということが分かった。

それから今12年経っています。日本はどのぐらい原発のコントロールがうまく行っているのかということ、みんなにちゃんと知ってほしいです。きちんとやっているかどうか、いろいろ調べてください。それを常に皆さんがプレッシャーを掛けないといけません。

もう1回起きたら、広島、長崎、福島、また日本かということで、日本の信頼は完全に沈没します。失敗から学ばない国だということが分かっちゃいます。ということをお皆さんと共有しておきたいです。

この間も実は衆議院で「そのフォローアップをしろ」と言われので、衆議院でやったんですけど、「今ウクライナで何が起きているか分かりますか」ということをまず衆議院の先生たちに言いました。50人ほど来られたんですけども。なぜかと言えば、国会事故調の報告書の最後にこういうことが書いてあります。

「私たちは、立法府に頼まれてこの分析をしました。これは日本もきちんとした対応をしていなかったということなんです。ですから、それをちゃんと立法府の人はフォローしてください」ということを書いてあるので、立法府ではちゃんとそれを行っているかという委員会は一応つくってありますが、まだ数回しかやっていませんが、私がまだ委員長をさせられているので、「もう替えてくれ」と言っているんですけど、久し振りにこの間やりました。

そのときに先生方に言ったんですが、「今ウクライナで起きていることは何だか分かっているんでしょうね。日本は大丈夫だと思っているんですか。もし大丈夫じゃなかったら、それは立法府、法律をつくる先生たち、あなたたちの責任なんです。役所の責任じゃありませんよ」という話をしました。

これも公開してあります。議事録は出ています。皆さんも読もうと思えば読めます。

これからの日本に不可欠な 海外からの視点と交流

というようなことで、今までの日本はやっていました。これからの日本はどうしようかというのは、誰がどのように教えるのでしょうか。それは私は1つには、大学の先生たちは当然大人ですし、それだけの人たちですから知ってなくちゃいけません。大学の人、大学の先生、いや学生になれば、そのぐらいのことは自分でも調べられるはずですよ。ぜひそういうことを広げて、二度とこんなことは起こしたくないという国民が増えない限り民主主義は機能しません。

ということで、先日あったこのフォローアップの委員会では、50人ほどの超党派の議員先生が来られましたけども、そのとき私はこういうふうに言いました。「あなたたちは国会議員ですから、法律をつくる責任者ですよ。ですから行政から来る新しい政策とか、いろんなことが来ますけども、その政策は必ず衆参両議院で議論します。決めているのは立法府なんです。議員さんなんです」。

だから、その議員さんたちに「あなたたちは、日本の法律を決めている責任者なんです。それがうまく行かなかったときは、自分たちがそれを直すという責任があるということをお分かっているんですか」ということから始めましたけど、皆さんそういうことを思っていますか。

企業でも困ったときに霞ヶ関に行くというのは、民主主義になってない証拠じゃないかって私が言っているのはそういう意味です。やっぱり議員さんが大事なんです。法律を変えなくちゃいけない。こういうことを皆さんに、私は言っておきたいなと思っております。

それで福島の事故というのは、日本では初めてあれだけの事故を、役所や専門家が調査するわけじゃなくて、私たちのような第三者に調べさせたわけですよ。ですから、私はそれを全部オンラインで公開して、しかも会議の日時もアナウンスして、英語の同時通訳も入れて、それ、ですから消すこともできない

い。世界中がそれを知っている。だから、日本がしっかりやってくださいという意味です。

皆さんは何をするにしても、グローバルでネットがあって世界中が見ているんだということを十分認識しながら研究をし、教育をし、学生さんは勉強して、次の世代は何なんだということをしっかりやってくれるということが、それぞれの大学、役所、それからやっぱり特に大事なものは立法府である知事さん、それから知事のスタッフの人たち、そして内閣、議員さんですね、国会議員の役割というのは非常に大事です。

ということを皆さんにぜひ理解してもらって、立法府が決めるというのは、立法府は法律を決めるところ、その決まった法律をきちんとやるのが行政府の責任なんです。という話を、あなたたちに私は伝えたいと思います。つまり、日本の認識は自分たちでつくっていく。議員さんを選ぶのは自分たちで選んでいく。もちろん知事さんも自分たちで選んでいく。自治体にはどんどん皆さん要求をください。その要求はやっぱり世界から見た、例えばあなたたち県の素晴らしいところは何なのか、ということを世界に知ってもらおうじゃないですか。

私ができる。あなたたち、できない。そんなことないですよ、今はインターネットが世界中につながっちゃっているんです。知事さん達もものすごく頑張っていますよ。だから、うちの知事はどうなんだよということを、知事さんなんて断る必要ないんですよ。いろんなインターネットで友だちをつくるということから言うと、私が知事さんをお願いしたいことは、その国に、その県にいるまだ若い人たち、小学校、中学校、高校、大学に行くときなんかは、高校生なんかはぜひ外の大学に行ったらどうだろうかということ、エンカレッジしてもらいたいなと思います。

という、例えばイギリスでもどこでもいいし、アメリカでもいいし、ああいうところは入学試験なんかありませんから。だからそういうところに入ると猛烈に勉強させられますけれども、今私が言ったような郷土を思う心、日本を思う心、やっぱり日本のいいところは誇りに思っているんだけど、日本に足りないところはこうなんだよということに気がつくようになりま

す。

そうするとそういう人が増えれば増えるほど、知事さんにこういうことをしてほしいんだ、私たちはこういうことをしたいんだ、こんなことをしましょうよという声が増えてきて、やっぱり知事さんにもプレッシャーになるけど、知事さんにも、私たちの高知県でもこんなになれるんだよっていう話ができると思うんですね。

ですから、私が今若い人たちに言っているのは、特に大学になったら1年ぐらい休学してどっかへ行ってこいよ。アフリカでもいいしアメリカでもいいし、つまり大学は1年休んだって困らないんだから、4年の授業料で1年休んで5年掛けて卒業しようって話をしているんですけど、なかなかみんな広げてくれないんですね、企業も新卒にこだわっちゃってるところがまた問題なんですけども。

だから一浪しても同じことなんだから、やっぱり4年の授業料で5年を掛けて卒業しよう。その1年間はどこかほかの国に行く。インドに行ってもいいし、アフリカでもいいし中国でもいい。いろんなところに行ってもいいし、なぜかと言うと、同じような年頃の人たちと友だちになりますよ。そういうところの大学に行ってもいいですよ。

1年休学してでもいいし、向こうの大学と知事さんがMOAを模索して、向こうから2、3人来いよ、こっちからも2、3人毎年送るからねと言ってやると、フィリピンなんかはみんな英語ですからいいと思うんだけど、そうすると「今度高知から出てきた学生ってすごいよね」って、「みんな、何か世界のいろんなやつと同じような友だちと、たくさん友だちつくってくるんだよね」って話になるだろうと思いますので、ぜひそんなことを考えてもらえると嬉しいなと思います。

というのはどうでしょうかねというのが、私の十何年もアメリカでキャリアをつくった人としては、日本のいいところは分かるんだけど、日本の弱いところが非常に分かってきて、これがすごく健全な愛国心になるんです。日本の中、良くしてくれよ。

いろんな意味で尊敬されているんだけど、もっとこれやればいいじゃないのというのは、1人1人がそういうことを見つけてきて、将来のリーダーになるような同じような年頃の人が、ああ私はイギリス

にも友だちがいるし、そういえばドイツにもいるし、結構私は中国とかインドにもたくさんいるんだよねなんていう子どもたちが何人も高知県から出てくると、高知県のあり方もPRアジェンダになりますし、なんかすごくワクワクするような国になってくるんじゃないかなと思いますし、高知の大学とか病院とかいろんなところにも、海外からの若者が1年ぐらい研修に行きたいなあなんてことが起きてくるんじゃないだろうかというのが私の気持ちで、私だから若い人たちに言っているのは、「休学のすすめ」ということを言っています。

休学してどっか行ってこようということで、そういうことを例えば1つの町とか、それからやっぱりそういう県の中でやってみると、何となく変わってくると思います、いろんなところが。国全体でやろうとすると、非常に難しいので、やっぱり都道府県とかのレベルで若い人の1年交換、こっちから1年行かせるから向こうからも来いよと。高知にある大学の中でもいろんなところから違った国の学生さんがどんどん来るようになると、日本大好きになってくる人はたくさん増えてくるし、先生も片言でもいいので、いろんなときに時々英語で話すとか、英語の授業が増えてくるのも悪いことじゃないので、ぜひ知事さんが思い切ったことを少しずつ始めると、なんか坂本龍馬ではないんだけど、やっぱりそういう変人というか、変わったことだけどいいことをやる人というのは非常にこれから大事だと思います。

というふうなことで私のプレゼンを終わらせていただいて、Q & Aに入りませんか、というのが私の提案なんですけど、いかがでしょうか。

(司会)

黒川先生、ありがとうございます。

先生がお話の中でアメリカに留学された経過なんかもお話しされましたが、それはお手元に配布した『時代の証言者』という、これは読売新聞のですね、昨年の5月から7月にかけて連載されたもののコピーを付けてありますので、また後からでもご覧になっていただければ、現地でどういう苦勞をされたのかななども書かれていますから、分かると思います。

それでは、とりあえず先生からのお話は一旦こ

で区切るとしまして、ご質問、質疑応答の時間をとりたいと思いますが、とりあえず会場の皆さん、今のお話を聞いて黒川先生にご質問等があれば、すいません、挙手をしていただいて、お名前をおっしゃっていただいたうえでご発言いただけたら幸いです。よろしく願いいたします。

いかがでしょうか。ではどうぞ。

(会場)

どうも今日はありがとうございました。私、田中正晴といいます。今日のお話なんですけどちょっとずれるかもしれませんが、先生の今日のお話で、立法府が法律決めるっていう話をされてましたよね。

立法、法律を決めるっていう。その部分なんですけど、今国政選挙であれですよ、投票率が50%、それから地方選挙等ありますけど、あれだと30%ぐらいじゃないか、30%前後ですね。

これ上げる方法というのは分かりませんか。これが質問です。

(黒川)

これはすごく大事な問題で、まずいですよ、こんな低い投票率は。これはやっぱり政府もそうだし、大学もそうだし、みんながとにかく投票に行こうというようにしないと民主主義は機能しないですよ。だからこんな30%なんて言っているのは、ほんとにみんな、それは国民の責任じゃないかと思うんだけど、しかし政府もしょっちゅうそういうことを言ってなくちゃいけないですよ。立法府の先生たちも言わなくちゃいけないですよ。とにかく投票に行くという、民主主義というのはそれをしないんだったらもうやっけてもしょうがないですよ、ということだと思います。

ぜひ大学も中学もみんなそうだけど、議員さんもとにかく投票してよということを、みんながいろんなことを言っていないと、30%なんてのは、みんな政治に興味がなくなっちゃっているのね。これ理解できないですよ。すごく大事な問題です。

(会場)

どうもありがとうございました。

(司会)

次の方、どうぞ。

(会場)

先生、今日はありがとうございます。東森歩と申します。高知県自治研究センターに所属している者になります。

先ほどの方の質問とも関係しますが、私の考えは、投票に行こうというのも大事だと思うんですけど、立候補するという被選挙権行使をもっと促進をするというところが、もしかして選挙の投票率を上げることの入口かなというふうに考えております。

それはそれとしまして、私、コロナ、新型コロナウイルスに関する質問といえますか意見なんですけども、いまだにアメリカに入国するのにコロナワクチンの接種義務が課せられていまして、そのコロナワクチンを接種しないとイケない企業が7社、8社ぐらいあるんですけども、指定されているものが、そのうち半数近くがアメリカ企業になっていると。つまりアメリカに渡航しようとする人は、アメリカ製品を購入しなければ入国できないという条件が課されているという、この不均衡さに非常に不満を持っておりまして、今日先生ご用意いただいた資料の内容が、このコロナウイルスに関するデータが各種出ておりまして、私、この日本がワクチンの開発で周回遅れというふうに言われてもう久しいと思うんですけども、先生の見解がありましたら、この資料に基づいて幾つかご紹介をいただけたらと思います。いかがでしょうか。

(黒川)

資料を付けたのは、実を言うとコロナですけども、最初アメリカで大騒ぎしていましたよね、ニュースなんかでもそうなんだけど。あれはジョンズ・ホプキンス大学のデータだと思うんですけども、アメリカではあの頃バタバタ死んでいるんですよ、あれ見ると分かると思うんですけど。

もう3年目ですけど、最初の1年半とか2年まで、アメリカはみんなが死ぬと、死んだ理由というのはみんな書きますよね。この死因というのはそんなに間違わないですよ。だけどアメリカ、イギリス、フランスは、あの最初の1年半ぐらいの死因のトップ

はコロナなんです。だから、あれだけ大騒ぎしていたんです。毎日たくさんの方が死ぬんだけど、アメリカ、イギリス、フランスが死因のトップはコロナなんて信じられないでしょう。それは日本がずっと少ないからなんです。何で少ないか分からないんだけど、とにかくあの人が大騒ぎしていたのはそのコロナでバタバタ死んでいるからなんですよね。

それであのときメッセンジャー RNA で作ったじゃないですか、抗体を。あれもカタリン・カリコさんという人、元々ハンガリーの人ですけど、あの人もそんなことが役に立つとは思ってなかったんだけど、どうやってタンパクが作れるのかなという話でメッセンジャー RNA を作っていたんですね。それを作っていたのはカリコさんがやった仕事、ペンシルベニア大学でやったんですけども、たまたまそれが役に立ったということなんです。

研究というのは、役に立つことじゃなくて何かを知りたいから一生懸命やっているだけの話で、これを見て、あっ、こういうことができるんだっていう話になって初めて会社が買っちゃったわけです。カリコさんが副社長になっていたじゃないですか。あれは何でかという、こんなものが起こるからだと思ってるわけじゃないんですね。

それで彼女がやったことが画期的だったから、彼女が何の役に立つかっていうのは、簡単にタンパクが作れるからってやっていただけの話なので、タンパクをつくって抗体が作れるということをやっていただけなので、ビオンテック社がそれを見つけて、彼女をすぐに引っ張ってきちゃったわけですよ。だけど目的はコロナじゃなかったんだと思います。コロナは明らかにその前に、もう20年から言われていたがんの治療に何か抗体ができるんじゃないかとか、そういうのがどんどんあったので、多分それでビオンテック社は使っていたんじゃないかと思います。

だけどそれがたまたまこの研究の成果、ああこれで抗体ができるんだって話で、作るのはその抗体になるようなものをすぐにその DNA で作っちゃったわけですね、RNA で。だから、これがたまたま偶然コロナで役に立ってっていうことを、その研究はそのためにやっていたわけじゃないんだけど、そういう意味で素晴らしかったなと思います。

日本だとどうしても役に立つということが先に来

ちゃうところがちょっとまずいんじゃないかなと、知りたいことを一生懸命やれって私は言っているんですけどね。それが研究というものだと思うんですよ。何でこうなるんだろうって話を一生懸命知りたいというのが研究者だから。

だからワクチンがバツとできるようになったというのは、先見の明があって、ビオンテック社はバツと彼女をとってきちゃって、それで副社長にしちゃっていたのが、たまたまコロナが来たもんだから、それで抗体をすぐに作れちゃったって話なんですね。だけど彼らはがんの治療とか、そういうことを考えていたと思いますよ、元々は。だけど、これで一気にお金持ちになっちゃったっていうのがまた偶然ですよ。

(会場)

ありがとうございます。世界の大学の緊急開発投資、日本が16位か何かかなり下位のほうにあるのは、今先生がお話されたもしかしたら役に立つことを求められるので、そのあたり投資がスポイルされているのかもしれないなというふうに感じました。

(黒川)

私はだから、そこで今大学の問題について随分話をしているんですよ。つまり大学では学生さんを育てるわけですよ。大学院に行くということは、どの分野もそうだけど、大学院というのはその将来に向かっての研究をする人じゃないですか、法律でも何でもいいんだけどね。そうすると、日本の場合はどうしてもタテ社会なので、先生のテーマでやるわけなんです。ということは、やっぱり全く新しいことが出るということは、なかなか少ないんじゃないかなと思います。

私がなんでこんなことを言うかということ、これペンシルベニア大学に留学したときに言われた言葉なんです。つまりペンシルベニア大学には、私は人工透析ということを研究をして、日本で医学博士になってポスドクで行きました、アメリカで。その先生に最初に言われた言葉は、私はそれほんとに今でも言っているんだけど、「あなたはもう博士なんだ。私のところに2年の約束で来たんだけど、あなたは博士だから何をしなくちゃいけないかということはどういうことなんだ」って、3つのことを言われま



した。

「あなたはもう博士なんだから、私は教授だけど、私と同等なんだ、研究者としてはね。だから、それをまず覚えとけ」。2番目には、「だから、あなたは私のところに2年いるんだけど、その間にあなたがしなくちゃいけないことは、自分は独立した研究者であるということを証明することなんだ」って言われました。3つめは、「私たちのやっているテーマはこうだということは知っているよね。だから、そのテーマからあまり離れなければ何をやってもいいよ。とにかくあなたは独立した研究者であるということを証明するための2年間なんだ」って言われました。

これが私にすごく影響したと思います。あ、そうかと。私、先生が何かテーマをくれるんだとばかり思っていたんですよ。これ日本人だから。そうじゃないんですよ、向こうは。常に一つ一つのテーマで、自分は独立した人になるんだということを証明しなくちゃいけないんです。だから、博士になるまでは先生の指導のもとでやっているんですよ。でも博士になったら、次のステップは、自分が独立した研究者なんだということを証明する時間だというのが向こうの、というかアングロサクソンの考えなんです。

日本はどうしてもタテ社会の中なので、先生のところまでドクターになって、ポスドク後先生になって、それから助教授になってって、こういうタテ社会では新しい研究は出てこないですよ、ということを私は言っているわけ。これは大学の責任だって言っているんですけどね。

だから、あなたのおっしゃるとおりで日本の研究が今低迷しているのはそこですね。新しいことをやらなくちゃいけないということのルールです。

(会場)

ありがとうございます。

(司会)

ほかにかがでしょうか。どうぞ。

(会場)

どうも先生、ありがとうございました。有光といいます。先生のこの『時代の証言者』の中にもあって、ちょっと先ほどの質問とも関連するところあるんですが、この研究テーマで、自ら探せということで、先生が指導された教え子の方も何名かいると思うんですが、ひょっと何か面白いエピソードなんかあればですね、教えていただきたいです。よろしくお願いします。

(黒川)

それはいました。私が帰ってきたときに、私の下でやりたいという人は大体腎臓を専攻にしたいという人が来るわけですね。私が腎臓学クラスを持っているからなんだけど、ほかの専門の先生ももちろんいますから、腎臓の勉強をしたいということでお医者さんになって、医学部を卒業して医学博士になるわけじゃないですか。

そのテーマは何かというと、お医者さんなので、まず臨床はもうばっちりやりました。特に臨床医になる人は、腎臓の臨床もばっちりやりました。それをしょっちゅう本を読ませたりいろんな議論をしながら育てましたけど、それで自分が何をやりたいのかを私に言えと言いましたよ、その腎臓の分野で。いろんなことを教えて、患者さんを見ながらやっている中であなたは何をしたいんだということを、ま



ず私に自分で言ってこいよと言ったんです。

こういうテーマはどうでしょうかって話して議論をしたうえで、じゃあやみましょうということで、時間は3年ぐらいしかありませんから、臨床をやった後で腎臓に行きますから、いろんな臨床をしながらこんなことを議論していると、これちょっとやってみたい、やりたいという人が出てきますから、一応指導しました。指導をしてやり方を教えて、その自分のテーマでやるようにしましたけど、その後博士号を取ったら、みんな留学したいわけですよ。だから留学先も、彼らがどの人のところに行ったら伸びるかなという話で、そういうところに紹介してみんな行ってもらいました。ほとんどの人がそれぞれ2、3年行きました。

だからそういうところへ行かせてある程度研究もできるようにして、また帰ったということで、それはなぜかという、私がそういうふう育てられたので、私の責任は自分の部下をつくることじゃなくて、どこでもいいからとにかく次の世代のそういう研究者になるような、大学にいるような人たちを作るのが私の責任だと思っていたので、本人がやりたいテーマにぴったり合うような人のところへ、一流の人のところにみんな送り込みました。それがすごく大事だと思います。

それは私がそういうふうアメリカで育てられたからですね。いろんな競争は激しいんだけど、いろんな先生に育てられながら、やっぱり指導しながら競争していたというのがすごく大事だったと思います。

よろしいでしょうか。テーマは自分たちで選ばせて、それを選択後は、自分たちの能力をさらに伸ばすようなところにみんな2、3年留学させましたよ。

(会場)

全く違う道に進んだ方とかではなかったですか。

(黒川)

同じ腎臓関係ですけどね、最終的には開業する人とかいろいろいますけど、少なくとも研究する能力、自分で考えてどういうふうにするかということをしていないと、次の世代を指導できないじゃないですか。だから、そういうのはすごく私アメリカで鍛えられたこともあるし、自立することが大

事なんだということをずっと繰り返し言われていたので、やっぱりそういうのを次の世代にも渡そうとしています。

日本はどうしてもタテ社会なので、教授の後継ぎになるために教授のテーマでやるというのが多いんですけど、それはもうできるだけ避けるようにしました。そんなことでよろしいでしょうか。

(会場)

どうもありがとうございます。

(司会)

よろしいですか。ほかにいらっしゃいませんか。はい、どうぞ。

(会場)

松尾と申します。国会の事故調査委員会の話が出たときに、「規制の虜」ということで世界の原発のルールはどんどん厳しくなっていくにもかかわらず、日本政府はチェックをしていなかったというお話がありました。なぜこのようなシステムになっていたんだろうということと、この先政府は新たに原発を進めていくと、そのお話の中で60年を超した原発もオッケー、稼働していなかった年数もそれにプラスする、それもオッケー、政府自らがこういうふうな案を、案というか政策を出してきているということと、このチェックをする国のシステムということの関係性がいま一つ分かりません。

(黒川)

いやあ、厳しいですね。そうなんです。みんながそう思っているということが大事でね、もっとたくさんの方がそういうことを考えれば、やっぱり違ってくると思うんですね。

1つは、この間もその話をちょっとしたんだけど、今ウクライナで何が起きているか、知っていますよね、みんな大学にいるわけだから。つまり小学校じゃ分からないかもしれないけど、高校生は分かると思うんだけど、大学になればますますそうだと思うんですけどね。少なくとも、それから大学を出て役所でやってもそうだけど、今ウクライナで何が起きているかというのは、プーチンが何か時々

爆弾なんか打ち込んでいるじゃないですか。原発に当たったら何が起これると思いますか。

でしょう。それじゃあ日本は何を考えているのかと思っっているんです。それで実をいうと、その前に起こったことは9.11（ナインイレブン）ですよ、ニューヨークで起こった話ね。テロリストがやったでしょう。知っていますよね。2011年に起きたのは、9.11（ナインイレブン）というのは、ニューヨークでテロリストがあのでかいツインタワーを爆破したじゃないですか。

覚えてますよね。大きな摩天楼みたいなのに飛行機が突っ込んだやつ。

あれと同じことが起こったらどうしますか。つまりテロリストは、自分が死んでもやるわけじゃないですか。でしょう。だからあの頃から原発はものすごい、そう言っちゃあおかしいけど、やばいターゲットじゃないですか。一発やられたらどうするか。

世界中が何しているか、知っていますか。フランスはたくさん持っていますよ、原発。原発が多いんだけど、あの9.11が起きたでしょう、ニューヨークで。あのでっかいビルが飛行機一発でみんなひっくり返ったわけじゃないですか。あれから原発は危ないなということはみんな分かっているんで、世界中で何しているか。

フランスも50基ぐらいあると思いますが、全部ね、あれから原発はテロリストのターゲットで危ないので、そういう人たちが来たときにどうするかということで、今はみんな軍隊が守っています。だって、テロリストというのはその気で来るわけだから。

あの福島原発事故が起きたときに、私は専門家じゃなかったんだけど、福島で起きたので国会事故調をやらしてもらったから分かったんだけど、少なくとも原発はテロのアタックのターゲットになるからものすごく厳重にしていますよ。ものすごく厳重というのは、軍隊が守っているんですよ。日本やっているといますか。あれまではやってなかった。今は一応やっていますけどね、やっていますけど軍隊が守っているということは知っていましたか？

というのは、原子力発電に関してはIAEA（国際原子力機関）というのがあるでしょう。IAEAがみんなルールを決めているわけですよ。だけど、ルールをきちんと守るかどうかはそれぞれの国の責任で

すよ。例えばルールを決めてって、ロシアとかそのとおりにやると思いませんか。やるかどうかはその政府の、その国の責任でしょう。だけど少なくともIAEAという、原子力発電についてのルールを決めているところがウィーンにあります。そこは日本もちゃんとお金を出しています。

だから私、ウィーンにも呼ばれてしゃべりに行ったけど、テロとかいろんなことがあるから、どんどん守るルールが厳しくなっているわけですよ。もし事故が起こったらいけませんから。

それであの福島のとときにIAEAの人にも会いましたが、日本はルールをそのままきちんとやらないということ、みんな知っていましたよ。私たちだけが知らないんですよ。私も知らなかったんだから。IAEAのルールは日ごとにやっぱり厳しくなっているわけですよ、世界がそうになっているから。特にあのニューヨークの9.11の時に、こんなことをやって飛行機で突っ込んでいるんだということがあったので、これが原子力発電所に当たったらどうなるだろうって、みんな思ったんですよ。だから今はみんな、フランスや何かもそうだけど、みんな軍隊が守っていますよ。

日本はどうだったか。あれまでは警官だったですよ、警察。今はちょっと変わったけどまだそこまで軍隊はいってない。だから、国会事故調の報告書にもそういうことをちゃんと書いていますけど、日本はやらなくちゃいけないんだけど、それをやらせるかどうかは立法府なんです。立法府がやるためには、あなたたちが選挙で選ぶ人たちの責任なんですよ。民主主義というのはそういうことだから。分かりますか。

つまり誰を選ぶかというのは、自分たちが選ぶ議員を決めることなんですよ、それが民主主義だから。独立した調査委員会を法律で決めて、つまり立法府が法律をつくって、独立したその委員会を使って福島の事故を調査するというのは、日本で初めてだったんですよ、こんなこと。つまり日本の行政府をチェックしたわけじゃないですか。

だからこれは、それも行政府、政府だけじゃなくて立法府、今までの立法府も無責任だったって結果を出したわけですよ。ちゃんと世界のルールに合わせてないわけじゃないですか。それは政府だけじゃな

くて立法府も合わせてないということを知っていたら、やらなくちゃいけないし、知らなかったじゃ済まない話ですよ。だから、その議員を選んでいるのはあなたたちですし私たちの責任なんですよ、最終的には。それを言わせるのはメディアじゃなくちゃいけないんですよ。だから私がもうこの20年、メディアはおかしいと言っているのはそういうことです。

政府の取材をするときに、これはけしからんみたいなことを書くと、政府から「来なくていいよ」って言われちゃうんです。だから、そういうところに問題があるんですよ。そこはやっぱり皆さん一人一人が選ぶ国会議員に、それをやってくださいねということをおんなが言うぐらいになるとちょっと変わると思いますよね。だからちょうど民主党になった頃に、「やっぱり二大政党にして、時々変わらなくちゃいけないよね」ってみんな言っていたけど、それでなんか一時期、しばらくそういうことが言われていましたが、あつという間につぶれちゃいましたよね。

というのは、あまりそれを慣れてなかったせいもあると僕は思うんだけど、だけどやっぱり何回か失敗しながら、皆さんがもう何でも自民党じゃなくて、やっぱり違った政党に変わると。二大政党というのはそういうことなんですよ。だから今だってアメリカで、デモクラシーとその違うのがもう一生懸命競争しているじゃないですか、イギリスもそうだけど。日本もそうしたいんだけど、まだなかなかならないですね。

だからそれは国民一人一人の責任なんだけど、それをどうして変えればいかなというのが私の問題意識で、私みたいに十何年もアメリカでキャリアつくっちゃうと日本人じゃなくなる、日本に帰れないと思っていたわけです。だけど帰ってくると、そういうおかしさに気がつくわけですよ。だからあの原発事故には、すぐにそういう独立したものをつくらなくちゃいけないよというのは、アメリカがそういうことをすぐにやっているから、私はすぐに分かってやっていたんですけども、あの時。でも独立したもの作らなくちゃいけないよなって、日本では誰も言わなかったような気がするんですよ。

だから、独立したものを作ってくれと、そういうことを議員なんかにはワァワァ言っていたから、最終的に

あのときは自民党が野党だったからかもしれないけど、とにかく作ったわけです。ああいうのを作ったけども、私はこれはすごく大事な問題だからもう全部公開にしてやると。オンラインでもやると。英語でも同時通訳でやるというのは、世界と共有しているわけです。それやっているプロセスをね。なぜかという、すごく危ないじゃないですか、原子力って。みんながこう何と言うか、そんな余計なことするなよという人が多いわけだから。だから私は公開しないと、自分もやばいなどと思っていましたから。

だから全回公開しちゃって、全部英語で出していると隠せなくなっちゃっているんですよ。今でもネットで探せばいつでも見られるようになってるし、英語でやっているよという、あれだけの問題ですから、世界中がもう知っているんです、今でも見られるから。英語で見られるから、実際誰が何を発言してるかってのも全部見れますから。そういうやり方はすごく大事だと思うのね。大事なことは全部英語の同時通訳も入れて世界中にネットを出しちゃう。だから今でも見られますよ。

世界中が見ていたからこそ結論が出たっていう話で、その原子力関係の人たちもみんな何で起こったんだろうと見てるわけじゃないですか。だから終わったらもうすぐにアメリカから「来てくれよ」って、すぐにしゃべりに行きましたし、アメリカの कांग्रेस（国会）にも呼ばれてしゃべりに行ったし、フランスやイギリスにもしゃべりに行った。いろんなところに呼ばれてしゃべりました。

あと、英語の同時通訳も入れているというのは、自分たちの委員会を守るためにやっているわけだから。日本語だけでやっていたら、もう手間がかかってしょうがないじゃないですか。だから常に次の委員会をいつやるか、公開して英語の同時通訳も入れているわけです。

そうやって公開してやること、それが消せなくなっているということはすごく大事なことです。分かるでしょうか。だから皆さんも、選んだ議員たちに「とにかくあなたたちのやっていること、毎週やってこいよ」とか、「公開でやってちょうだい」という話をどんどんやらなくちゃいけないと思います。

よろしいでしょうか、そんなことで。特に大事な

ことは公開してというのが、ものすごく大事です。英語通訳も付けてついでに出しておいてね。

（会場）

その公開もしくはその独立性のある委員会を設けるということについては、立法府が責任を持ってやれということですか。

（黒川）

そうです。そうだと思います。なぜかって、立法府は法律決める所だから。行政つまり役所がもちろん出してもいいんだけど、それは必ず衆議院、参議院でやるでしょう。最終的に決めているのはみんな議員ですから、選挙で選ぶときに、「あなたたち責任者なんだからしっかりやってよね」という人たちが、この高知県では増えれば増えるほど厳しくなってきましたよ。

と思いますが、どうでしょうか。お金持ってきてくれるのもありがたいけど、やってよねっていう話だな。

（司会）

よろしいですか。

（会場）

ありがとうございました。

（司会）

会場ではかにいらっしゃいませんか。どうぞ。

（会場）

先生ありがとうございます。そのメディアの責任です。そのメディアと行政府もしくは立法府が結託というかね、中の情報が流れてないというふうなことになっても、私たち知るべきがないんですよ。今はネットとかそんなのはたくさんあると思うんですが、そのメディアを強くする方法、もしそんなものがあれば教えていただきたいんですが。

（黒川）

それは実をいうと、今までのメディアって新聞とかそういうのがあったでしょう。だけど今ネットの

時代になっちゃったから、いろんなクエスションを出すいろんな人がいろんな意見言ってきます。だからネットの時代って隠せないんですよ、実をいうと。特に日本の場合は日本語でやるでしょう。これがまずいんです。つまり、みんな大学出ている人が多いから下手でもいいから出来れば英語でも出しておくといいですよ。そうするといろんなことを言ってくると、かなり変わってきますよ。外の見方って違うんだって、いろんな見方が入ってくるので。

今は Google のトランスレーションというのものもあるんだけど、もう 3、4 年前に比べるとものすごく良くなっています。だから日本語で書いて、それを Google トランスレーションで英語で出して、それも一緒にくっつけて出しておくといいですよ。きっと世界中で見ているから。そういうマインドありますか、皆さんに。ネットで書いたら、英語で書くのはめんどくさいでしょう。だけどそれは Google の英語に直すというのをやると、すぐ出てきますよ。今チャット GPT か、あれもやるでしょう。あれもものすごく正確ですね。どんどん良くなるから、もういまやほんとに隠せません。

だからあなたたちが日本語でしゃべっていても、すぐに英語で出るようになりますよ。大丈夫。日本語で話していても、英語で書いてくれるって言えば大丈夫ですから。どうでしょうか。

(会場)

そのメディアの発信が...

(黒川)

そうそう。メディアの発信もそうだけど、個人でやれるんですよ、ネットの時代は。だからほんほんツイッターでもいいから何か出していると、少なくとも日本人はこういう人がたくさんいるんだということが分かってくるので、ぜひ一緒にやろうよってまず言いながら、1 週間に 1 回か 2 回ちょっとつぶやくのも悪くないんじゃないかなと思いますね。

どうでしょうか。そういう人が増えれば増えるほど、やっぱり地方の知事さんもだんだん緊張してくるし、いい人が選ばれてくるし、やらなくちゃいけないなと思うと思います。知事さんを応援することですよ、いいと思ったら。おれたちの知事さん、い

いぞとかね、ちょっとまずいよねとかいうのをどんどんやっていくと、つぶやくというのは結構大事なかなと思います。

(会場)

ありがとうございました。

(司会)

それでは、オンラインの方で質問等ある方はいらっしゃいますか。いないですか。

(事務局)

チャットで来ています。

(司会)

ちょっと読み上げてくれる。

(事務局)

すみません。そしたらチャットで来ていますので、ちょっと読ませていただきます。

(事務局)

「お話を伺い、宗教思想家の内村鑑三ですかね、の言葉を思い出しました。彼は母校の記念式典に臨席した際、その挨拶の中で出席者に対して次のような辛辣な発言をしたそうです。「札幌（農学校）は、昔は大人物を輩出していたが今は見る陰もない。今札幌が世に送り出しているのは、1 従順な官吏、2 利欲にたけた実業家、3 穏当な紳士だけだ」。若者を発憤させようとしたのか、はたまた率直な危機感の表れなのかは分かりませんが、私が学生の頃も「政権の子羊になるな」と警鐘を鳴らすリベラルな教員はおられました。

しかしながら昨今、一層大学は就職予備校化し、技術的事項の伝授に終始しているように思います。大学が政府や各商業メディアを含む財界に懐柔されてしまっていると言えなくもありませんが、この傾向は国立大学法人化の影響が大きいのでしょうか」ということです。

(黒川)

いやあ、そのとおりだと思いますね。だからそう

いう声を、そういう考えというか、そういうつぶやきを、いかに広げるかってすごく大事なんです。結局民主主義というのは皆さんが選んだから、代表を。だからネットの時代はそれ広げやすいんだけど、福島での原発事故みたいなすごいでかい話は英語の同時通訳も入れるといいかなと思いますね。

つまり日本人だけに言っているわけじゃなくて、世界に言っているということなので、そういう意味では、今おっしゃったとおりにあの頃に海外に行った人、新渡戸稲造なんかもそうなんだけど、あの頃に船に乗って海外に行った人なんてそれだけの覚悟があったんだと思うんですよ。今みたいに簡単に行けるときに、もっともっと行ってほしいのね、若いときに。

それで行くと、新渡戸さんもそうだし、あの時代に船に乗って行った人というのはみんなそれだけの苦勞をして行っているの、やっぱり行ってみると日本人であることは絶対変わらないんですよ、国籍が変わっても。日本を思う気持ちっていうのはすごく強くなって、新渡戸稲造さんも「日本人って何でこんなに駄目なんだろう」ということが分かるようになるんですね。駄目っていうわけじゃないんだけど、なんか島国根性というかね。

だからやっぱり大きな世界観ができるというのは、外から見た日本というのはよく見えるんですね。というのは自分の国だから。自分は日本人だから、国籍変えても日本人だから、私がさっき言ったように、そういう気持ちというのはなってみないとなかなか分からないので、ぜひ高知の人たち、どこかの大学に行ったら、1年休学してどっか行ってこいよ。

そういう人が1年間でもぶー太郎でも何でもいいから外に行くと、いろんな人に会う。いろんなところに行く、そして見る。いろんな偉い人に会うかもしれないんだけど、自分の同世代に会ってもいいんだけど、帰ってくると、それで感じるのは、「日本っていいなあ、おとなしくていいよね、だけどこれじゃあ駄目なんだよね」って、日本をほんとに愛する気持ちが出てくると思うんですよ。

就職してから休むってなかなか難しいので、1年、大学のときはもう大人ですから1年休学すればいいんじゃないかな。もし不満だったら半年やってみて、またあと半年行ってみるのもいいと思うんですけど、

だから4年の授業料で5年かけて卒業しようと言っているのはそういうことです。

つまり世界に行くと、新渡戸稲造もみんなそうだけど、日本を思う気持ちというのはすごく強くなるんだと私は思います。だから若い人にはぜひちっちゃな奨学金でもいいから、高知県があげるから1年どっか行っておいでよというのはすごくいいことだと思いますけど、やりませんか。やっぱり県ベースでできるんじゃないかなと思います。

だって、もともと土佐ってそういうところだったじゃないですか。ジョン万次郎もそうだと思うし、行ってくると変わりますよ。なんか気持ちが世界みたいになっちゃって、日本を思う気持ちっていうのはものすごく強くなってくると思います。ぜひやったら、ほかの県のトップにも結構いいメッセージになるんじゃないかなと。それはすごくいいアイデアだと私は思っているんですけど、いかがでしょうか。

(司会) ありがとうございます。オンラインの方でほかにいらっしゃいますか。どうぞ。

(オンライン)

岡林といいます。先生の資料の賃金関係のもので、OECD加盟の2020年の購買力平価ベースの平均賃金と、あとG7と韓国の2000年の平均賃金の推移で、あまりにも日本が低いですが、これはもう言うなれば、あまりにも非正規労働者の賃金が、日本は正規に比べて給与平均低いから、こういう数値になるという判断でいいんでしょうかね。

(黒川)

いや、例えば日本は成長していたんだけど、成長したのはいろんなものの輸出品が、日本製品が一番性能が良かったから買ってくれたわけですよ。それはさっき言ったように、つまりラジオとかカメラとかいろんなもの、作ったじゃないですか。だから作ったもので、アメリカから入ってきたものを小さくとか薄くするとかいうのは得意なんですよ。だけど、見えないもので売れたものって何かありますか。

作ったものは行くんですよ。時計もそうです。あいうのは日本人得意なんですよ。手でやってどんどん早くするとか、小さくするとか薄くする。これ

は得意なんですね。だけどオリジナルなもの何か出ましたか、日本から。多分ソニーがつくったものが幾つかはそうだと思います。それはタテ社会で横に動けないからですよ。変なこと言っていると、タテ社会だと上がれないんですよ。全体がうまく行っていると特にできないんです。

だから、やっぱり違った意見を言うというのはすごく大事ですね。違ったことを考える、行動してみる。本田宗一郎なんかそうじゃないですか。トヨタもやりましたよ。トヨタは、元々は豊田織機だったわけでしょう。その長男が、これからは車だって言ったのは喜一郎さんだけ、あの人は東大の工学部行って、アメリカへ行っちゃうわけですよ。これから車はこうなるんだって言って、それで変わったわけですよ。

本田宗一郎は「これから車か」って。あの元々自転車の修理をしていた人でしょう。それがこれから車をやるんだってやるわけじゃないですか。このパッションってすごいですよ。その戦略は、教育じゃなくてその心だと思っただけ、だから本田宗一郎はそれで後からやってきて、とにかく一番すごいをつくるんだって。最初につくったのがアメリカに来るわけですよ、1970年代ですよ。

来てみたら、もう大きな車がばんばん走っていて、日本のちっちゃい車なんかだと、ハイウエーを走ったら置いていかれるようになっちゃうぞなんてみんなに笑われていたんですけど、その中で売るのがものすごく難しいわけですよ、向こうのほうがはるかに上だから。それで本田宗一郎、何したか知っていますか。

あの人が、何の教育もあまり受けてないんだけど、自転車商だから、それであのバギーをつくるわけですよ。行ってみたら、みんな砂漠で遊んでいるんで、バギーをつくったら、えっホンダってこんな面白いのをつくってくれるんだってという話で、向こうの人の気持ちをつかんじゃうんですね。だからそういうことを、相手がどんな人たちなのかってということを見抜くってすごい大事なことだと思うんですね。

だから、そういうのが今日本ではちょっと足りないんじゃないかな。今までのものづくりを真似をして、形を真似しながら、それを小さく薄く軽くするっていうのでうまく行ったんだけど、新しいもの

ていうのはあの時代でも出なかったと思うんですね。

それで本田宗一郎は、自社製の車を有名にするためにはとにかくレースで勝つことだってこう考えちゃうわけですよ。だからレース参加をまずやって、世界のレースで勝たせるわけですよ。こういうやり方をするというのはやっぱり教養というよりも、あの人のすごいセンスだと思いますね。そういったコンチキショウというのがないと、なかなかそこまでいかないんじゃないかなと私は思ってるのでね。「エスタブリッシュメントから新しいこと出ないよ」って言っているのは、そういう意味なんです。

皆さん、ここでちょっと一言言っとくけど、皆さん、アップルとか使っているでしょう。あれつくった人ってスティーブ・ジョブズじゃないですか。ご存じですよ、みんな。iPhoneもiPadもみんなスティーブ・ジョブズじゃないですか、つくった人。あの人は貧乏で大学行けなかったって知っていますか。そういう人なの。

それで、ぜひこれ見てください、宿題。あの人は大学へ入ったけど貧乏でドロップアウトしちゃうんです。なんだけど、あの人は、スタンフォード大学で2000年だったと思いますが、卒業式に呼ばれて20分ほど話します。大学の卒業式に何かの祝辞を言うってそこへ呼ばれることはすごい名誉なことなんです、アメリカでは。

「Steve Jobs's Stanford University Commencement」って、このキーワードを入れるとすぐ出てきます。今日必ずみんな読んでください。これ素晴らしいスピーチです。キーワードは「スティーブ・ジョブズ」「スタンフォード」、それだけで出てきますよ。私にメールくれませんか、みんな、何を感じたか。これをディベートしましょう。これはほんとに素晴らしいスピーチってみんなが言っていたからだけ、あなたたちはどう思うか。ちょっとぜひ知りたい。

そういえば今のトヨタの豊田社長、あの人も大学で呼ばれてしゃべっています。それまで「あの人はどうせ駄目だろう」ってみんなが言っていたときに、あの人はボストンの大学へ行ったんだけど、そのときに彼が呼ばれて、コメントでスピーチしました。このスピーチは素晴らしかった。それでみんなびっくりして、彼を見直しました。その後は彼すごい頑張って、やっぱり今でも彼は非常に高く評価

されるようになりましたよね。だから、そういうスピリットがあるなと思いました。

(司会)

じゃあ、スティーブ・ジョブズを見られた方は、自治研究センターまでメールを寄せてください。コメントを寄せてください。お願いします。

ほかにいらっしゃいますか。会場のほうもよろしいですか。

じゃあ、すみません、最後に私から1点質問をさせてください。

日本学術会議の問題についてです。2020年の10月だったと思いますが、当時の菅首相が、105人の候補のうち6人を任命をしませんでした。

(黒川)

そうですね。

(司会)

ええ。その任命をしなかった理由については、いまだに説明がされていません。総合的に判断したとか、丁寧に説明はするんだとか言っていますが、いまだに実行はされてない、そのまま。ところが今国会に新たな改革案が出されようとしていまして、それは会員の選考に第三者が関与するという内容でして、政府は「透明性を高めるものなんだ」と理由を言っていますが、何よりも学術会議、あるいは学術そのものの自主性、独立性を大きく毀損するものであると思いますし、第三者委員の選定に政府が口出しをすれば、結局は政府に都合のいい学術会員しか選定されないことになってしまうのではないかと危惧します。

安倍政権以降、NHKの経営委員であるとか日銀総裁であるとか内閣法制局長などなど、さまざまな関連組織の人事に政府が口出し、横やりを入れてきました。学術や知のあり方そのものに対する敬意が感じられませんし、アカデミーの中立性、継続性を損なうものではないかと考えますが、黒川先生の見解をお聞かせください。

(黒川)

厳しい質問ですね。だけど嬉しい質問です。私は

時々話していますが、皆さん、どう思っていますかってことなんです。私は学術会議の会員でした。なっているうちに、私いろんな意見をどうも言っちゃってもんだから、最終的に会長になっちゃったんだけど、皆さん、学術会議ってどういうプロセスでできたか、ということをもとに考えること大事なんです。

私、会員になったときに、これは一体何だろうってすぐに調べました。つまりある程度、どの国もそうなんですけど、どの国もある程度成長してそれなりの富ができてきて、高等教育ができるようになって大学ができるとか、そういうようになってくるわけじゃないですか。ある程度国が豊かじゃないと大学なんかできませんよね。今アフリカ見ていてもそうじゃないですか。

だけど、今のアフリカみたいところ、日本も開国したらうまく行ったのはやっぱりなぜかって考える必要あるんだけど、鎖国してましたけどね。ある程度国が豊かになると、必ず教育が大事だって言って大学ができます。高等教育の機会が増えます。そのうちその人たちが大学を卒業すると、いろんなエリートになったりビジネスやったりいろいろあるけど、必ずその教育を続けるための先生たちも出てきます。

そうなる何が起るかという、研究もできるようになるというのは相当教育とそれからバジェット、ある程度成長してこないとそんなことできません。それでやってくると、アカデミーというのをつくるようになります。それはイギリスの場合はロイヤル・ソサエティです。アメリカの場合はナショナル・アカデミー・オブ・サイエンスです。

このアメリカのナショナル・アカデミーって誰がつくったか。私は向こうにいたから分かったんですけど、これはリンカーン大統領です。リンカーン大統領というのは非常に貧しい家に生まれて、勉強もあまりできなくて、大学もたいしたところ行かなくて、それであの人は何したかという、南北戦争を始めた人です。

何で南北戦争始めたか、知っていますか。リンカーンは大統領になりますけど、あの人は忠実にアメリカの最初のコンスティテューション（憲法）をつくったJ・ワシントンなんかのことをちゃんと考えているわけですね。あの人は高等教育は十分じゃな

いんだけど、それで南北戦争を始めたのはなぜか。考えてください。

これはアメリカ南部諸州では奴隷がたくさんいましたね、黒人とか。これはアメリカのコンスティテューションにこんなこと書いていませんよ、一人一人は平等だって言っているんだから。ということで、あの人は南北戦争を始めるわけですよ。なぜかと言えば、北部で大統領になったときに、その奴隷制度を残しているということは自分たちの憲法に合っていないんじゃないかということでやるわけですからね。

その最中に彼はナショナル・アカデミーをつくるわけです。なぜつくったかということ、アメリカもワシントン以来、これだけの国になったんだから、そろそろアカデミーをつくったらいいんじゃないかということでつくったんです。つくったのはリンカーンなんです。しかもこの南北戦争をやっているというのは、アメリカの憲法に合っていないということで南と始めるんだけど、そのぐらい憲法を大事にしてた人なのね。

これから学術会議じゃないけど、そのアカデミーをつくりましょう。アメリカはこれまでこれだけの富と国を築いてきて、大学卒業生もこれだけでつくりましょうというのをつくったのはリンカーンなんです。だから、アメリカのアカデミーに行くとエグゼクティブルームというのがあったんだけど、大きなプリント、写真がないから大きなプリンターがあるんですけど、真ん中に大統領が立っています、リンカーンが。右側に5人、学術のエリートがいて、もう片っ方に政治のほうのエリートがいて、リンカーンが真ん中に立っています。こういう立派なことができていたんです。

ですから、日本も明治維新から開国したときに学士院をつくったんです。学士院というのは150人いて、その頃あまり年金もないから、いろんな分野に分かれていて年金をもらえたんです。今でも年金があります、学士院は。150人って決まっているんですね、だから誰か死なないとあと入れないんです。

だけど私が学術会員になったときに、何でこの学術会議があるのかなと、学士院があるのにもかわらずと思って、いろいろ調べたんです。いつできたのか。これは戦争に負けた後にできたんです。あっ、これはアメリカがつくったんだなということが分かったんで

す。つまりアメリカが来て、アメリカもアカデミーがこうなんだからつくったんだ。そのとき学士院も入れたんです。学士院を入れてこういうふうにしますということをしたんです。

だから私もアメリカにたまたま十何年もいたから分かっているんですけど、アメリカが来てるときにつくったんです。学士院もやったんだけど、アメリカの占領から解放されて、日本が独立した後、学士院の先生たちは、何て言えばいいか分からないけど、学術会議なんかとおれたちは格が違うんだ的な考えがあったのかどうか知らないけど、分裂しちゃうんです。

学士院は建物があるし、上野に。だからそういう何だかちょっと私は納得いかないなと思っているんですけど、それで私会員になったときに調べたんですよ、すぐに歴史を。それでアメリカでは、「政府についてのいろんな助言をしてくれ」って、ちゃんとリンカーンは言っているんですよ。「立派な人なんだから、政府についてのいろんなアドバイスをください」と。だから、それをやっているんです。

だから今でもアメリカではいろんな法律などが出てくると、学術会議がいろんな委員会をつくってレポートを出すんですよ。そういうプロセスができていたので、私はそれを知っていたので、学術会員をやったときに「そういうことをやろう」と言って、幾つかやりました。

学術会議、なぜそうなったのかということを考えるということが、すごく大事なんです。今はネットでいくらでも調べられますから、それで調べて、あっ、だから学術会議は日本がアメリカに戦争負けて主権回復したときに、学術会議はこうふうにできたんですよということを会員の皆さんに説明したんだけど、なかなか自分のこととしては理解できないのね。

それで実は、こういうエピソードがあるんです。実は私は農水省とかいろんなところに行って、「そっから何か課題をください」と。一番の大きな課題はお米だったんですよ、あの頃。アメリカのお米を日本に輸入するということが随分あったでしょう。そんなのが来たら、向こうのお米が安いから駄目だって言って抵抗してたわけですよ、日本は。だけど私ロサンゼルスにいるからよく知っていたんだけど、アメリカのお米も結構うまいですよ。だけどその頃農水大臣に

「こっちに諮問してくれ」と言ったんです。そしたら農水大臣が「しましょ」と言って、お米のことで諮問が来たんです。

そのときは亀井静香先生が農水大臣でしたが、亀井さんに「諮問を出してくれ」って言って日本の農業についての諮問が来たんです。そのときに、私たちは委員会をつくって書いて、その書いた要旨を、英語にして、それであるときにメキシコのカンクンでWTOの会があったわけです。そのときの1つのアイデア、1つの意趣は、アメリカのお米を日本が受け取らないのはけしからんという話があったんです。

私たちは、日本の農業というのは、単にお米をつくっているだけじゃなくて水の調整とかもみんなやっているし、日本はしかも山国なので、山の川をちゃんときれいに使ってやっているから、肥料なんかも使わなくて、自然をきれいに使って、しかも山を壊すことなく、そこでお米をつくっているんだという話をして、非常にそういう何というか、アメリカから反対しているだけじゃなくてそういうつくり方をしているんだよって話を、学術会議のコメントとして英語でつくって出したんです。

亀井先生はそのとき、カンクンでやったWTOにそれを持って行った。アメリカのお米もって買えて話。亀井先生、農水大臣で帰ってきたら、みんなにこれを見せたら、「えっ、日本ではお米のことでこんな学術会議に諮問して、学術会議からこんな答えを、こんなことをやって、こんなプロセスで政策つくっているのかってものすごい尊敬されちゃった」って言っていました。

だから、そういうことなんですよ。政策だけでなく、アカデミーにそういう意見を問うということはずごく大事なプロセスなんですよ、アメリカではそれやっているんだけど。そういうことを日本の議員の人たちもあまりやってないし、そういうプロセスをもっと使ってくれって私は言っていたんだけど、私は4年ぐらいでやめてしまいました。

そういう意味では、学術会議の先生たちもそれを言っているんだけどなかなかやらないね。だから、そういう歴史的な背景を見るということは常に大事なことで、あのときお米については学術会議に諮問したところこういう答えをもらいましたってということを見せたら、すごく感動されちゃったって言って

いました。そういうプロセスを知ってもらおうということはすごく大事なことで、皆さんもある程度学術の人たちをどう使うかってすごい大事なことなんですよ。そうすると、「やってくれ」と言っても、政治的にニュートラルでそういう答えをちゃんと出しているというプロセスが見えるようになってくると、やっぱり知事さんや政治家もすごく尊敬されると思うな。特に外に行ったときにはね。そういうことをぜひやってみるといいんじゃないかなと思います。

(司会)

ありがとうございました。

(黒川)

だから、ああいうことを人事でやっちゃあものすごくまずいんですよ。

(司会)

時間も大分押してまいりましたので、もうこれで質問とかなければ終わりにしていきたいと思います。

なお、黒川先生のお話しされた内容は、著書であります『考えよ、問いかけよ』というこの本に凝縮されていると私は思っておりますが、受付のほうで販売しておりますので、ご希望の方はお買い求めください。

それでは最後に、高知県自治研究センター理事長である東森から閉会のご挨拶を申し上げます。

(東森理事長)

本日は黒川先生、お忙しい中長時間にわたりましてご講演をいただきましてまことにありがとうございます。私、先ほど質問の第2番目を務めさせていただきました理事長の東森歩と申します。本日はありがとうございます。そして皆さんもお忙しい中お集まりをいただきまして誠にありがとうございます。年度末でなかなか繁忙を極めている中ではないかと思えます。私、先ほど先生のお話を聞きながら、最近一番日本の国内で注目を集めましたワールドベースボールクラシックという野球の世界大会がございました。あの中にも「出る杭」的な選手が何名かいて、二刀流で通用するはずがないと言われた大谷選手、ダルビッシュ有選手に至っては最近は

Youtuberとして野球のゲームの世界ではかなり有名になっておりまして、あの方多分野球をするよりもゲームすることのほうに意識を注いでいた方。それからアメリカ生まれながら日本人の母親を持つメジャー選手が日本チームに入ってこの出る杭の選手がほかにもたくさんいたと思うんですけど、それでもってアメリカという国を破って世界で優勝すると。こういったところに多くの日本人の方が共感をし、胸のすくようなそういう思いをしたのではないかなということが先生のお話を聞きながら、そしてなぜ勝てたのかということをもっと深く考えなければならぬなというふう感じた次第です。

私共の公益社団法人高知県自治研究センターは本日の黒川先生のお話を十二分に参考にさせていただきながら、これからの高知県内におけます生活課題様々な行政の課題に正面から向き合っていくながらですね、皆さんと共にどうすればこの高知がよくなるのか、あるいは高知がよくなるのかということを考えながらこれが日本全体にどういうふうに影響を発信していくのか、先ほど先生が

言われましたように、日本語とともに英語で発信するというようなことも参考にさせていただきながら歩みをこれからも進めてまいりたいと思います。また新年度もですね、こういった等身大の日本を見つめるセミナーなど様々な切り口でフォーラムであったりとかセミナーを開催してまいりたいと思いますので、今日のご参加の皆様におかれましては引き続き高知県自治研究センターの活動にご注目いただけましたら幸いです。少し長いご挨拶になりましたけれども、本日お集まりいただきました皆様に改めて感謝を申し上げます。閉会の挨拶とさせていただきたいと思います。本日は誠にありがとうございました。先生ありがとうございました。

(司会)

黒川先生長時間ありがとうございました。皆さんの拍手で黒川先生のお礼に変えたいと思います。よろしくお願ひします。ありがとうございました。



東大医学部を卒業後、1年間のインターン（無給の研修医）を経て、1968年に医局へ入りました。卒業生として4年間、医学博士の学位を取得するための修業です。当時の東大病院（本院）には内科で四つの医局があり、私が選んだのは吉利和教授率いる第1内科。教授の講義で「真面目に勉強している先生だな」と感じていたからです。あの頃は数少ない腎臓の専門家でした。医局では最初、先輩の指導を受けながら病院内を回り、いろいろな病気の患者を診ました。血液や尿などの検査も、また中核査部のような部門



物言う科学者 黒川 清

に任せて、自分たちでやったので、精進しました。そこで、博士論文の研究を始めます。教授が私と与えたテーマは、慢性腎不全の患者の血液透析でした。腎臓は、血液を濾過して老廃物や余分な水分、塩分などを取り除き、体内の環境を一定に保つ働きをしています。この働きなくして、私たちは生きることができません。腎臓の代わりに機械で血液を濾過する透析器を、数十年前に開発して、戦後、欧米に使われ



透析に携わってくれたローン医師（左）の男性。数年後、腎臓をみるまでした（1970年頃、米カリフォルニア州）

した。それを克服したのが、米シアトルのベルテインク・スクリプス医師が考案したフック透析器の「シャント」です。▲考案されたシャントは、人工の管で動脈と静脈をつなぎ、透析する時は管の一部を外して装置に接続する。シャントは世界をリードする透析研究の拠点となった。東大の外科が急性患者用に透析装置を1台もっていませんが、慢性患者に使うにはシャントが必要。それをどうやって入手するか。「米軍の病院なら持っているかもしれない」と考えて、東京・立川の米軍基地へ相談に行きました。そこで私は大きな幸運に恵まれます。ロビン・ヤムウチ医師との出会いです。立川へ運ばれるのはベトナム戦争の捕虜兵で、腎不全は高性が多かったはずですが、彼はなんとシアトルにいた腎臓専門医。シャントをよく知っていた。米軍からシャントを取り寄せ、無償で分けてくれたのです。しかも、透析を担当する看護師や技士のチームを、東大へたびたび派遣してくれる。彼の後任のアレクサンダー・スローン医師も、同様に協力してくれました。おかげで、慢性腎不全の患者に透析を重ねることができました。ただ、透析装置の中心部は1回この使い捨てで、その値段が当時の公務員の初任給より高かった。今「週一回」が定着していますが、最初の頃はお金持ちでも週一回程度の透析で、数か月延びさせるのがせいじでした。（元内閣特別顧問）

受験を白く見ていた私は、東大しか受けずに落ちて、浪人しました。神田の駿台高等学校（現・駿台予備学校）に試験を受けて入ったのです。が、成績がどうも伸びない。優秀な人が午前の組で私は午後の組。「そんなにできなかつたんだ」と実感しました。それまでは、おたたられた調子に乗っていただけ。必死に頑張ら、このくらい勉強をしなさらなければいけません。教員が月ごとのシラス勉強会をやらせたり、2回目の受験に「今度は大丈夫」といふ気持ちで臨みました。医師を目指していたので、今度は慶応大の医



物言う科学者 黒川 清

学部も受けて、両方合格。学費が桁違いに安い東大に入りまし。1968年の春です。東大は国営だから安かったです。1年浪人したら移住料が1万5千円。奨学金で物価が1万5千円に値上げ。小さい頃からろは代々、内科医」と聞かされていたので、勇気の私は医師になるものだと自然に思っていました。ただ、当時はまだ東大に「理科系類」がなく、私が入ったのは、農学部や理学部の生物系などに進む人が中心の理科系類。3年生からの医学部へ進むには、改めて入試を受けねばなりません。僕らの少し前までは、この試験に落ちても別の学部に進めたのですが、いわば「履歴書」で翌年に医学部を再受験する例が後を絶たず、農学部などどこでは困った問題でした。それで、医学部の試験に落ちたら一度退学という厳しいルールが変わっていた。でも、医学部を受ける理科系類生の中から、確か目ごとの成績の上位数十人だったと思いますが、少し加点してくれました。「メタを履かせる」と



医学部の野球部で遊戯を守った

ペンシルベニア大学はフィラデルフィアの市街地にあります。大学から車で30分くらいの郊外のアパートに住むことにしました。

日本からベトナムにきた医師の家族が、他にも誰か4組いました。特にお隣は、東大の同期で子ども向け小さい子がいる家。

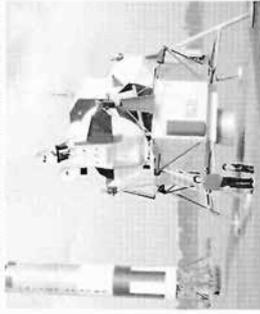
僕たちので、共通の話題がありよく話しました。

「フィラデルフィアは、1776年にアメリカ独立宣言を採択した建国の地。宣言起草でも有名なベンジャミン・フランクリンがたてを構えて『雷は電気だ』と確認したことも知られる。」



豊かな国 混乱の時代

「ベッドルーム(1LDK)のアパートで、隣隣で住んでいた。2軒家の広さを感じました。団地は緑とテールがあります。僕は建築前、東大助手として約5000円でしか、ペトナムでは500が(当時の為替レート)で5万円となり、車はあつたらならなクランクを買いました。さすがに新車はあまり買えませんが、毎日それに乗って研究室に行くことに気持ちよかったです。車の色が



ベトナムで無料駐泊が当たり、車でフロリダ旅行へ。展示されている手回し車もでかかった。

物言う科学者 黒川 清

線から目が変わりました。養育や車のローンを支払うので生活は精進まりまりで、食や、食の豊かさは驚きました。スーパーで飛んでいる肉も牛乳も、サイズが大きい。マドナルドのハンバーガーなんて、最初に食べてこんな美味いものがあるのかと思った。確か1個200円(当時100円)くらいじゃないかな。何度も行きました。ただ、米国社会が凶暴化していた時期です。私が渡来する前年には、キング牧師やロバート・ケネディ上院議員の暗殺もありました。ベトナム戦争をめぐる混乱が広がり、人種間の対立が激しかった。『マーチン・ルーサー・キング』は、米国の黒人から950〜00年代、差別撤廃を求めて展開した公民権運動の指

導者。「私には夢がある」の名著で知られる。68年4月に暗殺されたその2か月後、大統領候補と目されていたケネディも凶弾に倒れた。医学部はキャンパスの端にあり、すぐ隣が黒人街。「運んでくまないと危ない」といわれたので、朝早く研究室へ行き、なるべく夕方5時から6時には帰っていました。仲間には「車を持ってこない方がいい」と警告されていたのですが、私はジャズが大好き。有名バンドが黒人街のクラブに来た時、研究室にいる黒人の技師が「一緒に行こうよ」と言うので、それで行きました。そんなことが3回あったかな。他の研員は、やばいぞ、と、たいさう言われた。半世紀前のことです。(元内閣特別顧問)

私の留学先、ペンシルベニア大学の起源は、米国の建国に立ち、1740年代まで溯ります。医学部は、米国で最も早くの年に設置されたという歴史があり、とても格が高いとされています。

その医学部で、生化学の部門長を務めるハワード・トラスムツセ

ン教授が、私のボスです。私はその研究室にボスとして入りました。私の前にこのへ留学した東大の先輩たちと同じく2年間の予定です。

「ボストク(ボストロダト、博士研究員)は、博士号の取得後に就く任期付きの研究職。成果を上げることで大学の正職教員などへの道が



ボスから三つのルール

開けてくる。米国では、激しい競争の中で優秀な人が選抜されていく過程のこととして機能している。教授は皆の良人でした。『来ましたってあいつらにやらせ、教授を昇上げて緊張しているから、三つ言っておくことがある』という。まず「彼女は僕に博士なのだから、研究者として扱ってあげたい。今来たら、日本は、私の方が偉いと思っていた。俺があんたほど、意見は好まないってほ



ペンシルベニア大学で研究していた頃、フィラデルフィア郊外の植物園で家族と

物言う科学者 黒川 清

マからあまり外れなければ、自分が好きなのをやっていた。結局「先生を驚かせるような研究をしなさい」と思っていたら、これは衝撃的でした。驚いたというが、全総字想していなかった。日本の研究室のようだと、先生から「このテーマでやらなさい」と言われるものなどはあり思っていたが、それら。そしてもう一つは「英語が聞き取れなかった時は、選んで二回三回したままやり過ぎます、必ずその場で『分からない』と言ってくれ。この二つはすごく効いた。独立した立場で、言うべきことははっきり言う。この教えが今の私を作っちゃったのだと思います。『も、研究テーマを見つめなければ親戚するよ』とも言われたので、「テーマをください』ってお願いするから

うが、人生の分かれ目でした。結局「先生を驚かせるような研究をしなさい」と思いついて、1か月間、大学の図書館に毎日通い、論文や本をいろいろ読んで考えました。それが自分の性格なんだね。感動したのは、図書館が24時間15分閉鎖してしまふ。東大で選考をやった時は、欧米の先行研究の論文を読む必要はないのに、図書館が夕方閉まっちゃうので苦悶した。図書館は診察とかいろいろな業務があつて、なかなか行けないですよ。私は結局、2年で帰国せず、米国に14年とまるとことになったのですが、1983年に帰国した後、東大で図書館は夜も開けるべきだ」と言われたので、さきやか運動をしました。(元内閣特別顧問)

米国の医学部は日本と違って、4年制大学を卒業しから入り、さらに4年間医学士コースです。後半の2年は臨床実習に参加する臨床実習「クリニカル・シミュレーション」です。医学部を修了後、数年間の研修期間もあります。大学の関連病院では、学生と研修医が臨床チームを組み、教員が1が交代でチームの責任者を務めます。1977年にカリフォルニア大ロスアンゼルス校(UCLA)へ准教授として呼び戻してもらったのは、関連病院の退任軍人病院で年計数か月、チームの責任者となっていた。研修医らを引き連れて回診し、症状や診断方針について議論したり、治療の指針をた



物言う科学者 黒川 清

りします。夜間は宿直の研修医が診察し、必要なのはすべて私を呼びますが、大抵は翌朝に報告です。医師の別々の履歴をまとめるのが私の役割です。准教授の専攻は産科婦科学です。産科臨床チームの教員も、学生から評価を受けています。UCLAへ戻った最初の夏、「ドクター・クロカワは日本産科でしかやれない」といふ言葉を聞いて、このおもしろいからな」と書いた学生が、よく目につくくらいです。なまけて



UCLAへ呼び戻してくれたいヤック・コバーン教授(左)と黒川清(右)

人材の移動 大学に活力

らとします。あつはあつと語り、話すことにはなりました。受講生はもう一人くらいは出て、まらないうちにと教授から出て行きます。「ぜひ試合」と思っていた。

米国では同じ大学の中だけで派遣されるのを嫌います。4年制大学から医学部へ入る時、医学部を出て産科医になるのを望む学生は少ない。世間で言うように、上位を履く大学はこのように派遣する。このため、派遣台で職を合せている。人材の流動性がない。日本の大学が派遣するのは、仕方ないと思えます。

▲19年、UCLAの准教授から産科へ派遣した。私のこのUCLAの中で職えられませんでした。学生の評価は厳しすぎた。学生の評価は厳しすぎた。後、日本へ帰国してからのことですが、この大学の一人が「ドクター・クロカワはよく良かた」と言ってくれていることを知らず、勝手に思っていました。(元内閣特別顧問)

カリフォルニア大ロスアンゼルス校(UCLA)で研究していた私は、1974年、同じ研究室のチャール・マズリー教授が陣亡した。カリフォルニア大の産科臨床科長に就任した際、彼に誘われて二週に移り、准教授になりました。マズリーさんはイスラエルで医師になった後、米国へ移ってきた経歴があり、外国の医師が米国で免許を取る経験などについて、私にいろいろ教えてくれました。この大学の関連病院は、地元の公立病院です。貧困層の患者も多い。銃撃の犠牲者が夜中じゅう救急搬送されて



物言う科学者 黒川 清

きたりして、医師としてはいろいろな経験を積みました。陣亡には全くの虚言もありません。私もあつと天候な男が産科の中で、このUCLAの二週に入っている。もちろん向こうは病人な気がして、あれは怖かった。だつて並の囚人ならば、外へ出られない。ただ、してあげれば、普通の病室で構わない。監獄に一人で入るなんて、相当な凶悪犯ではない。当時の米国では、ベトナム帰りの若者が、いかに不幸な



南カリフォルニア大でマズリーさんと黒川清

ベトナム戦争の爪痕

を起していた。ストレスで物まみれになった帰還兵も少なくない。戦争の爪痕を感じました。▲米国は65年前からベトナム戦争に本格的に介入。一時は50万人以上を派兵し、73年の

搬送までに4万5000人以上が戦死した。75年の戦争終結後、社会主義国となったベトナムラオス・カンボジアから逃げ出した難民は200万人以上とも言われる。このうち脱出に小舟を使った「ボートピープル」は、日本にも押し寄せた。日本がボートピープルの受け入れを拒む様子は、米国でも報道されていました。「そんな恥かしいことをせず、しっかりと対応してくれよ」という思いが湧きました。異国で生きていく覚悟を決める日本にいたら、気づきにくい、世界の動きとずれが見えそうです。日本企業が親々と海外へ進出した時期です。ロスでは日本人駐在員がどんどん増え、その子どもを対象とした日本

語補習校が拡大してしまっただ。妻・圭子は日本で国語教師の免許を取っていたので、「ぜひ先生をしてください」と頼まれ、74年から教壇に立ちました。銀行の支店長やスズオと外交官など、教育熱心な親が多かったからでしょうか。妻の教え子は後に各方面で活躍しています。マズリーさんは結局、性格が合わないでケンカばかりしてしまい、私は3年弱でUCLAへ准教授として戻りました。四つある関連病院のうち、最初にいたシタースナイナイ医療センターではなく、今度「退任軍人病院」の所屬です。ここで産科臨床科長を務めるヤック・コバーン教授が「ここに来いよ」と呼んでくれました。(元内閣特別顧問)

今日は、私が米国で取り組ん
だ研究について話します。所属
する大学は、回答されました
が、腎臓を構成する組織がどう
働くのかを一貫して
探ってきました。
最初のペンシルベ
ニア大では私の前に
東大から来た来
田豊二先生(後に防
衛医大教授)から
腎臓でアトロフィ作
られる現象(萎縮生)
の研究を引き継ぎました。そし
てこの現象が本質アトロフィ
やカルシウム濃度などどのよ
うな原因に左右されるのかを調
べました。
当時、体内でのカルシウムの
動きをめぐってタマシロが注
目され、激しい研究競争が展開
されていました。タマシロの
アトロフィ型というタイプは



物言う科学者
黒川 清 15



1982年、米国で開催されたビタ
ミンDに関する研究会で講演

カルシウムの最初の吸収を
増やし尿中への排出を調節し
ひいては骨を丈夫にする方向へ
働く作用があるのです。体内
のタマシロは、腎臓で活性型
に変わると言われてきてい
ました。
腎臓での調節は、副腎皮質
ホルモンという物質の影響を受
けますが、このホルモンは血中

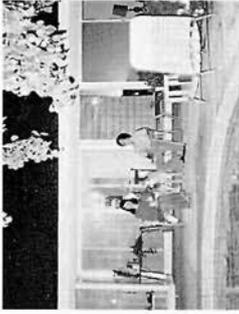
学歴をモットーに研究が盛りま
す。いわば身体組織として
血中のカルシウム濃度を一定に
保つ。この目標は、魚は骨
選して生き、海中でカルシ
ウムは不足しないし、硬骨
で体重を支える動物でない。敵
から必死にこたえなければなら
ない。
腎不全になるとこの仕組み
のバランスが崩れ、骨や血液に
様々な問題が生じます。腎臓は本
当に大事で驚異です。
研究はやりがいがあります
が、臨床や教育の面でも研究
資金の獲得は非常にアツシ
ヤイと感じてきました。教授に
昇進後、胃から出血して休んだ
こともあり、心臓も大がかりに
入れた気はあります。でも、米国を離
(元内閣特別顧問)

カコカニニ大コサ
ルズ校(UCIJA)で、1970
年に教授となされたのは、前副
学長(副学長)選任後、人事院
の医科科長を
18年かたに任せ
ました。前任の
ジャック・コス
ト教授が、そ
の歴史を語り
たのです。
他大学から
「よく練習し
ないか」と罵られることも
多々ありました。でも、私は
ロスが気に入っていただけ
に、ロスが教授を副学長に
もしてくれただけで、辞職し
ていました。「最近、ロスで
日本酒の文化が盛んになりま
す。私もその文化を
言いにきて。先生は、東京
で中学生となり、ロス生まれ



物言う科学者
黒川 清 16

の娘は小学生です。
UCIJAへ戻った7年頃、
ロス西部のエンシという高
級住宅街にアール付きの家を
買って引っ越し、家族4人と
秋田大アキとで心地よく
暮らしていました。
マイケル・ジャク
ソン(1982年)が
近所に住んでい
て、「メルソンズ
という高級スパー
でかい、「ハイマ
イ」の「ハイ」と
あいさつを交わした
ことが何度もありま
す。シャイででき
る青年でした。
そんな中、私が東
大第1内科の教授候補になっ
たの知らせが届きました。
かつて私に米国留学を勧めて
くれた医学部野球場の先輩
で、第4内科の教授になって
いた尾形悦郎先生を、推
大第1内科の教授候補になっ
たの知らせが届きました。
かつて私に米国留学を勧めて
くれた医学部野球場の先輩
で、第4内科の教授になって
いた尾形悦郎先生を、推



ロサンゼルスの高級住宅街エンシ
ンに購入したアール付きの邸宅で

薦者のようです。恩師の言刺
和先生からは「あなたがな
った時には決して断らないで
ください」との便りが届きま
しました。
《言刺氏は、黒川さんが第
1内科で博士研究を行った時
の教授。1970年、携業し
た「よき」が赤軍派学生に
襲つ取られ、犯人の一人が教
え子という事件に遭遇した。
東大を退官後、浜松医科大学の初
代学長を務めていた》
結局、その時は教授には選ば
れず、「辞退おめでとう。あ
なたがUCIJAにとどまるこ
とになって、我々は心から喜
んでいる」と、医学部長から
親書をもらいました。
ところが、尾形先生はあき
らめなかったんだね。あの人
も留学経験があったから、東
大を去るはならないと信念

を持っていただのでしょうか。自
分が人権を持っている第4
内科の助教ホストが突いた
時に、今度は「助教として
戻ってくれ」と言い出した。
82年秋、ロスで学会があつ
た時に我が家へ来て、「こん
な家に住んでたら、そりゃ無
理だな」とか言ってきた。
「何が何でも帰って来い。
東大にはお前が必要だ」と言
う。連日説得をやつて来て、
8日目の4日目は「肩を離
れなさい。帰らない」とて
朝も暗いまで粘らされた。
尾形先生の話をむげには断
れないから、「もうしつろか
な」と本言に悩んだ。そし
て、どちらに根負け。どち
ろかUCIJAを半年か1年休
み、東大へ行ってみることに
しました。
(元内閣特別顧問)

1983年に東大助教となつた後もしばらく毎月口サシやリスへ足を運び、様々な仕事をこなしてまいりました。教授として、総合カリフォルニア大学サンディエゴ校(UCLA)の業務が中心ですが、大参事やイベントもありました。84年のロス五輪です。日本からやって来る選手団を、現地の日本人や日本人で支えました。

▲84年ロス五輪は、「職業五輪」の異名で言われる。それまで開催地の自治体の財政負担が過剰に大きくなっていった五輪を民間資金で運営。テレビ放映権料やスポンサー料などの収入により、約50



物言う科学者 黒川 清

0倍の學を計上した。日本のスポーツ医学の大御所、國オリンピック委員会(I.O.)の医事委員も務めていた黒田雅雄先生は、東大医学部の大先輩。選手と物陰をなごらいつて私に相談がありました。UCLAに協力してもらいました。私の帰国前に準備はほぼ整っていました。大会中は現地の日本人の方々が熱いてくれたので、応援に行きました。

ロスの人々で忘れられないのが、和田フレッツ選手(左)とロサンゼルスで日本選手団を歓迎した黒川さん(右)



和田フレッツ選手(左)とロサンゼルスで日本選手団を歓迎した黒川さん(右)

ロス五輪成功へ下準備

多くの日本人が戦時中に強制収容所で苦労した話などを聞かせてもらいました。84年の五輪の時は高層でした。関係者が何かと相談する存在で、助けた選手団を温かく歓迎していました。

さてこの五輪の翌年、米ハーバード大で医学教育の有名な改革が始まりました。「ニユーバスキュー」(新)という新課程の導入です。米国の医学部4年間のうち、後半の2年は病院で猛烈な臨床実習を行います。前半の2年は早稲、講義で基礎分野などの知識を詰め込むのが中心でした。新課程ではこれを改め、1・2年生から症例への対応を訓練して考えたりさせます。

ハーバード以外の大学も同時期、様々な新課程を導入した

始めました。背景には、医療訴訟が80年代に増え、臨床の能力を高める教育が以前にも増して重要になってきた状況があります。また、生命科学の急速な進展も大きな要因です。知識は詰め込んでおくに古びてしまふ。臨床現場で課題に突き合いながら、必要なことを調べ、考える力が大事になってきました。

日本の医学教育はこうした世界の流れから取り残されていた。臨床実習は医師の診療をそばで見学するばかりで、自ら患者を診て病気の原因や治療法を考える訓練が乏しい。「よい医師を育てる」という最も重要なことが果たせていません。80年に神戸内科の教授となつた私は、教授会を改革を呼びかけ始めました。(元内閣特別顧問)

1983年10月、東大医学部第4内科の助教になりました。カリフォルニア大学サンディエゴ校(UCLA)の教授は、やむを得ずでなく、休職という形です。学生には「すごく働いた」と言われました。UCLAの黒川教授として、どんな先生なんだろ、こゝろで待たせていたら、コートの入ったジャケットを持って一人で臨床講義室に現れ、白衣も着ていなかった。偉い先生は白衣をまきい、助手に黒靴を拭かせるのが当時の慣例だったんだ。米国では白衣を纏って講義をする先生なんて、あまりないけど、病名など医学用



物言う科学者 黒川 清

語の日本語を分かつ、こゝろ何だろ、なんて学生に聞きながら、半分英語でしゃべりながら聞いていました。しばらくすると、私を無理やり呼び戻した。黒田先生は、東大の先生とは、どこか優柔、何でも知っていて、先生に言われたことへの対応能力は、思いのほか高い。自分でも、このくらい、知っていたら、いづれ、おとなの先生に与えられた



黒田先生(左)と「職業五輪」に参画した黒川さん(右)の2人目。1988年、京都

研究テーマ「自ら探せ」

人医師エルヴィン・フオン・ペルツ(1849~1913年)が日本は「科学をする精神」の育成が欠けていると力説しました。研究で「何をやる」ではなく、「何をしたい」というのを自分で探せることが一番大事なこと。でも、19世紀近くにもなると、また変わっていない。

▲ペルツは1876年、東京医学校(現・東大医学部)の教師として招かれた。豊盛の侍医も務め、1905年に帰国。その後、日記や手紙を長男が編集して出版された「ペルツの日記」は、当時の日本の様子を詳しく伝えている。

私は助教として、大学院生4~5人を指導する立場。最も大事なのは、良き医師を育てることで、博士号を取るための研究は、自分でやり

たいことを見つけさせたい。日ごろの回診やセミナーを通じて議論しながら、研究テーマは各自で考えさせました。そのうえで、何か始めてどう進めるか、研究のやり方を手紙で言いました。科学は、知りたいことをひたすら追究すること、大事なこと、伝えなかった。

結局、「こんな優秀な連中、ちゃんと育てないとかわいそうだな」と痛感して、日本に残ることを決意しました。でも、住環境は悪徳の差。父が生前開業していた病院の看護師仲間があったので、とりあえずそこに入りましたが、もう一つ、こんなには狭い？」と驚かれました。(元内閣特別顧問)

「グローバルヘルス」(国際保健)という言葉があまりありません。確か2000年代の半ば頃から広がり、国際的な機関として注目されてきました。

衛生保健の悪い途国に対し、先進国の援助で病院を作るといった活動は以前からありましたが、その効果は限られます。根本的に改善するには、保健医療に関わる人材を育て、社会の様々な問題を克服するなかで幅広い視点から取り組む必要があらる。国際連携を通じて、各国の事情に合わせた医療政策などを推進すれば、途国とどう暮らし世界の人々の健康を守ることにつながります。



物言う科学者 黒川 清 25

「健康格差」解消へ勧告

その潮流の中で06年、世界愛読者マルティン・セシ博士(イェール大学)が「健康格差」をテーマにした報告書「健康の社会的決定要因に関する委員会」を報告しました。この報告書は、様々な国の社会で、寿命や健康に悪影響を与える要因は何かを察し、改善につなげようという目的です。アイケル・マートット委員長(英ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン教授)から要請され、委員の任を引き受けました。委員はサリの大統領だつたりカルド・ラコス氏(アジア初のノーベル経済学賞受賞者)やマルティン・セシ博士(イェール大学)など、様々な国へ足を運んで視察や議論を重ね、08年に最終報告を公表しました。貧富の差などに起因する「健康格差」を1世代のうちになくそうと呼びかけ、「日常の生活状況を改善し、子どもの発言権を少女少年の教育に重点をおく」「母子健康支援の不平等な分配に対処する」などの行動を勧告しました。視察先や印象に残るのは、アフリカ最大級のスマム(言われずナイロビ)と(ナイロビ)の郊外のキムワス。家は土造りで、壁もトイレも自給も少ない。06年の視察当時、住民は契約方式で、その割は五分五分で暮らしていました。でもこのスマムのほかに、国の手本があつて、優秀な生徒が集まり、積極的な教育を受けていました。説明も手洗いを励行。先方も誇りを誇つていました。やはり教育こそが国の将来を築く



ケニア・キペラのモデル校。2012年に再訪し、子どもたちと交流した

のなかで「健康を改善した」ところで、ナイロビを訪れた時、娘・甲子が同じアフリカのついでに帰りました。「国境なき医師団」の活動で、健康が1日でも滞るといふ不安な異地に半滞在したことが、ナイロビのモデル校から携帯電話にかけてみたら、かなりメールを取り寄りました。便利な世界になつたのです。家は土造りで、壁もトイレも自給も少ない。06年の視察当時、住民は契約方式で、その割は五分五分で暮らしていました。でもこのスマムのほかに、国の手本があつて、優秀な生徒が集まり、積極的な教育を受けていました。説明も手洗いを励行。先方も誇りを誇つていました。やはり教育こそが国の将来を築く

(元内閣特別顧問)

2007年5月に英国のマイケレット・ベケット外相が来日した時、科学担当の内閣特別顧問として大使館での昼食会に招かれました。政治家も多敷いので、私がなんと私の席はテーブルで隣がベケット外相。驚きました。緒方貞子さん(元国連難民高等弁務官)やケラム・アライ駐日大使も同じテーブルです。英国では科学顧問はとも尊重される立場にあると聞き、感服するに及んで責任の重さを感ずりました。英国は、科学への信頼が社会全体で高く、科学者一人一人もその集団も社会的責任を強く意識しています。これは



物言う科学者 黒川 清 25

科学重視 英国の伝統

伝統です。国として、科学的根拠に基づいた政策を重視する。それによって、国際的な信頼と存在感を高めています。その中で、政策立案に大きな責任を持つ算科学顧問には、オーストラリアやニュージーランド出身者も登用されています。そういえば、お国柄ゆめが、安倍晋三首相が06年10月に私を任命したことは、直後に英科学誌ネイチャーが、度々報じていました。この頃、算科学顧問を務めていたケラム・キ



初めて開かれたG8科学技術相会合(2008年8月、沖縄県名護市)での内閣府提供

07年9月、安倍首相が辞任。次の福田康夫内閣でも内閣特別顧問の任は続いた。福田内閣の1年間で最も記憶に残るのは、08年7月の北海道洞爺湖サミット(主要国首脳会議)です。財務・環境など分野ごとの閣僚会合が開かれますが、科学技術分野はなかったので「今からやり直しよ」と提案しました。このサミットの主要議題となる地球環境や開発の問題をはじめ、多くの議題で科学技術が解決の鍵を握る時代です。08年の主要8か国(G8)科学技術相会合は同年6月に沖縄県で開催。招待国を含む16か国・地域の大臣や高官が出席。地球規模の課題解決に向け、科学技術協力などについて討議した。議長は岸田文雄科学技術相(当時兼務)

(元内閣特別顧問)

大学に国際化を求める一方、学生たちは休学してでも海外へ出ようと呼びかけてきました。種別編名の「学問のすゝめ」にあやかり「休学のすゝめ」がおすすめです。就職後に組織の一員として海外へ赴任するより、しがらみのない個人の立場で異国に飛び込む方が、視野が広がる。ながら学生時代がお勧め。留学やボランティアなど、様々な活動がありうるでしょう。個人同士の強い人脈を築きグローバル人材になる。当人はもちろん、日本にとっても貴重な財産になるはずです。多くの若者が相談に来てくれて、私は「失敗しても教訓にすれば



物言う科学者 黒川 清

「い。恐ろしく繊細し」と中身を拝見しました。2008年に出版した『甲生 断絶 断絶』の断絶は素晴らしい。休学してベンガシメに貧しい村の愛護生を支援するのは素晴らしい。その断絶をDVDで見て、タツタの学生生活の断絶を拝見すると、いつかアラスカで。▲断絶とは、断絶から準備を進め、10月6日に断絶授業開始です。この断絶は村の父が愛護生、17人が国立大へ進学。断絶のタツタにも「断絶」の断絶は「断絶」と断絶を

りました。でもこうした元気が学生らの活躍を通じて、ある問題に気づきました。私大の中には、休学中も相当な学費を徴収するところが結構あったので、「最近の若者は内向きで、海外に出たがらない」と言われますが、出たところの学生教育機関が後押しするところが結構している。日本社会を非常識。早くやめてくたさい」と声を上げたら、いつかの私大が大幅に減額してくれました。休学でなく、最初から海外の大企業に進む道もあります。米国などの大学では養生活費を中心としたベンチャー系教育が充実しています。その断絶を手を日本の高校生に体験してもらおうと、アラスカを米ハイパード大の年生だつた小

林 亮介君らと1年に始めました。世界各国から呼んだ学生たちと一緒に約1週間の合宿です。参加した高校生が米国や英国などの大学へ進学した例もたくさん聞かれています。三菱商事が最初から協賛してくれていて、最近はずっと開校しています。柳井正財団が17年に手厚い養老金制度を創設し、米英の名門校へ進む学生を支援しているのも、ありがたいことです。私が若者たちと出会うきっかけは、インターネットを通じて情報の発信と収集が多いですね。02年にブログでの発信を始めました。ツイッターでも発信していたのですが、13年に電子メールが乗っ取られた影響で使えなくなりました。あれは残念です。(元内閣特別顧問)

大学は大相撲見習って

2006年の大相撲春場所、所はモノラル勢が席巻し、小泉純一郎首相はメダルマガシで「外国人力士の活躍は相撲を世界に広げ、日本の文化を伝える友好関係を前進させていること、私たちが口にしてきたのが、大相撲の国際化」というキャッチフレーズ。日本で一流と言われる大相撲のようにならざるを得ない、優秀な力士が集まる場にしてほしいと願っています。▲向年の春場所は、朝青龍の優勝に加え、白鵬が築山と接戦、旭鷲山が敢闘、安馬(後の白馬富士)が技術的賞賛を授け、初めて外国人力士で三賞を独占。



物言う科学者 黒川 清

十何年アラスカ出身の把持部が優勝した。各回の断絶は世界中から優秀な学生を獲得し、優れた人材を社会へ送り出すこととして、断絶を創っている。日本の大学はその競争に加わるには、断絶が英語の講義を学ぶだけで卒業できるもの、優秀な教員を国内外から広く集めるなど、様々な要素が必要。

区別も出るでしょう。でも角界って、格式を重んじ、日本でもとりわけ保守的な社会だったはず。それに比べれば、大学の国際化と同様でない。英語での講義をためらう教員がい

「いいですよ、断絶したんですが、そききもあの人、いったん決めて口説きに来たら、ノリと言わずに、すごい油力の政治家でした。私が強く主張したのは、設立への取り組みを担う理事長の人選です。シドニー・アトウォーター(02年ノーベル生理学・医学賞受賞)にすべきこと。シンガポールと韓国、米国の東海岸、西海岸と、それぞれ拠点があつて、1週間単位で動き回り、世界の科学の動向を実によく知っていた。彼のおおげな世界の優秀な人は、筑波より、最高水準の教育研究拠点として磐石の基礎を築いた。今秋で開学から10年ですが、質の高い論文の割合は東大や京大を上回って世界有数のレベルまで出ています。(元内閣特別顧問)



●0-1の基礎を築いたアラスカ式 ●断絶の断絶に断絶された立派な断絶。断絶断絶が断絶された。いざ断絶する10年1月0-1の断絶

福島第一原子力発電所事故の国会事故調査委員会、大事にしたのは独立性と透明性です。キネコリタイを完全にしたパソコンと携帯電卓を委員とスタッフに配り、事故調の仕事にはそれを使っても徹底。利害関係者の接撃は記録に残しました。

関係者の聴取などを行う会合は、真昼の同時通訳付きでインターネット発信しました。公開性に期待する声は、海外から聞かれました。事故調査委員会法12条で、資料要求の強い権限が定められています。普通の請求だと合計2000件以上の資料を政府や東京電力から得られ



物言う科学者 黒川 清

ましたが、13件の資料に条を行使しました。仕事場は国会議事堂の脇にある審議室1別館。2月頃から少しずつ原簿の作成に入りましたが、調査が進むと新たな疑問も出てきます。任命からおおむね10か月経つという報告期限は延ばせないで、最後の2か月はほとんど休まず、なだびつぱらに近く作業を続けます。期間が近づく中、期をもちながら、同原簿の所長から、吉田昌郎さんの聴取で



福島県川俣町の仮設住宅を視察し、古川道郎町長(右)らの説明を受けた(2011年12月19日)一国会事故調の資料から

事故調提言 対応進まず

吉田さんには実際、お疲れの構えが見えました。でも、途中で燃焼切れそうになつたので、ナースコールをしながらい、「私、お医者さんがから大丈夫」と言つて点検を手エツクしていたら、急打ち解けた空面気になつたんです。結局、予定を大幅に超えて1時間以上、いろいろ話してくれました。

提言していたのは、様々な調査で何度も同じことを聞かれたのも一因となつたみたい。政府の調査に詳しく答えたのでその調書を見たら、さういふこと、それで、政府の調書の調書に同意する書面にサインしてもらいました。

2012年7月5日、報告書を参議院の議長に提出した。事故前の原子力規制は、規

制する側とされる側の力関係が逆転した「規制の側」に陥り、事故対策を阻んだ。その状態を許した制度や組織内の常識を変えなければ、たとえ人を入れ替えても再発は防げない。そこ指摘し「国会に規制当局を監視する常設委員会を」「原子力法規制を抜本的に見直す」「今後も独立調査委員会の活用を」など7項目を提言しました。

あれから10年。報告書の指摘や提言に対して、政府は取り組んだ内容を毎年度公表していますが、国会の対応は進みません。気候変動対策で原子力への関心が高まる中、日本の動きは世界から注視されているというところを、議員さんたちはもっと意識してほしいと思います。(元内閣特別顧問)

2011年3月、東京電力福島第一原子力発電所事故が起きました。海外での報道を追っていると、首相官邸や原子力安全・保安院、東電の発表は信用されていません。「事実を隠していること」が見られ、日本の信頼が低下していく様子に危機感が湧きました。

それで、官邸や各党の議員に「政府から独立した委員会を設けて調査するべきだ」と動きかけて回りました。大事故などが起きた時、独立の高い調査委員会を作るのは、民主主義の先進国では常識です。たとえば1990年代RSB(半海綿状酸素)の病原体が人間にも致死的な



物言う科学者 黒川 清

病気を起すことが分かり、欧州委員会が設置した調査委員。米田はウリーエール島原原発事故(1979)やスペースシャトル(1986年)、同時期にロ(2001年)などで調査を警戒しています。国会事故調査委員会の設置は9月末、参議院の全会一致で決まりましたが、思わぬ事態が待っていました。11月のあの日、事故調設置を主導した橋本武久衆議院議員(自民)と呼ばれて議員会館へ行くくと、他党の議員もいて「委員長をして



福島県川俣町の仮設住宅を視察し、古川道郎町長(右)らの説明を受けた(2011年12月19日)一国会事故調の資料から

原発事故 初の独立委

高向を調整した結果のようでした。「産と官がケル」になつて隠してきた闇の中を突き出す責任者なんて、身の危険もあつたのではよ。官と産の調整で一度は断りかけました。すると国会側の弁護士が説得に来た。東京・赤坂の本庁のロビーで1時間半くらい交渉。断れないと隣室に一家を警備して「など条件闘争を試みたけど、結局「回が起きたらすぐ対応します」と押し切られました。

委員の中には、様々な主義主張があります。でも、行政のあり方にも切り込むという国会事故調の役割は、議論を並べた報告では果たせない。私は各委員に「個々の価値観を物言わず、調査した事実を基に、委員全員で一致したメッセージを事故の教訓として発信していく」と説き、理解してもらいました。役所の審議会と違い、委員が主体的に調査する委員会なので、全体を仕切る「調査統括」が必要。統括能力はもちろんで、官庁や大手企業にしがらみのないことが必須条件。そう思つて頭に浮かんだのは、米コンサルティング会社マッキンゼー・アンド・カンパニー出身で郵政改革などに携わった宇田近さんです。12月初めに電話して頼んだら引き受けてくれた。ちょうど12月8日に発した国会事故調は、憲政史上初の独立調査委員会です。それを海外の政府関係者や識者に話すと、日本で前例がなかつたことに驚かれました。(元内閣特別顧問)

これまで世界各地様々な仕事に携わってきた。インターネットの発展、医療、AI、ビッグデータ、先端技術、創薬、宇宙開発、環境問題など、様々な分野で活躍し、英国が主導する世界保健機関（WHO）の事務局長から委員を務めた。このように、日本の政府に「誰か委員を紹介してほしい」と要請された。直接要請を受けることは、彼（彼女）が有意義な貢献をしてくれているという信頼があるからです。重要なのは、歴史や組織的な

異論唱える人材 大切に



物言う科学者
黒川 清
最終回

と認められない自立した個人として、臨時的な専門家として「大企業の大社長」として活動はありまじい。そういふのを日本人は世界でたくさん知っている。活躍の場を確保して、いつか日本にもあります。空気を



「異論を唱える人材が社会を元気にする」と語る黒川清氏（東京神田区の政策研究大学院大で）。一鈴木電三撮影

た。政府から独立した立場で提言をシクタンク（政策研究機関）も、米国では重要な役割を担っています。そのうちシクタンクを創設し、04年に日本医療政策機構を作りました。自らの熱い仲間が集まり、少子化や高齢化の課題を、提言や政策提言、世論調査といった活動を行っています。米シクタンク・ランキン（米産）で、国内医療政策分野のトップレベル（国際保健）政策分野のトップに上りました。民主主義の国ならば、社会の問題は国民が自ら改善していくべきものです。もう日本は何かと「お上」任せの企業家社長が目立つ。米国の

国会事故調査委員会の報告書は、もうすぐ承認され、2012年10月に公開しました。反響は大きく、私は様々な場面で呼ばれて説明し、多くの質問を受けました。特に海外の原子力や危機管理の専門家から、面会や講演の依頼が多かったです。福島第一原発事故から世界が学ぼうとしているのだと感じました。規制当局にも東京電力にも事なかれ主義がはびかり、規制する側とされる側の関係が逆転した「親御の顔」に陥っていたことは、政府から独立した立場の国会事故調査から指摘できたことです。それが海外で評価されました。

「因習に異議」海外評価



物言う科学者
黒川 清
31

12年1月、米交際「アオリン・ポリシ」の「世界の思慮深い人」に私が選ばれた。その理由は「組織内異論を唱える」という評価です。国会事故調査への要請を受けていると、国が選んだのだと、19年9月には、科学界や工学界で行き交う米関係者から「科学の自由と責任」をいふ言葉をいただきました。これも「日本型」の組織文化に異論を唱えることに対する異議を唱



ストックホルムで開かれたノーベル賞の関連イベントで、大村さん（左）と（2016年12月）

話が変わりますが、翌14年には、別のうれしい賞がありました。大村賢・北里大特別栄誉教授の「ガドナー国際保健賞」受賞です。ガドナー財団（ガドナー）が09年に同賞を創設した後しばらくは選挙に関わる委員を務めました。そして、大村さんの出事を委員会が説明してきたので、大村さんの発言をもとにした研究由業「イベルメクチン」は、年間に数億人が服用し、米西に広がる熱帯病「シロネ」の予防などに威力を発揮しています。世界の医学界ではあまり有名になつていなかったが、これこそ国際保健に役立つ素晴らしい業績だと、異論を唱えることにも力が入りました。

グローバルヘルス（国際保健）の分野では、日本政府の「野口英世アフリカ賞」という素晴らしい賞があることも紹介しておきましょう。08年から数年に1回、アフリカの感染症などに関する医学研究や、現地の公衆衛生の推進に功績があった人を顕彰しています。私は最終選挙の委員で、過去5回のうち、第1回、第2回の受賞者2人がその後、ガドナー国際保健賞を受賞しました。「ガドナー財団の賞は、ノーベル生理学・医学賞受賞者を多数輩出している」。大村さんは15年のノーベル賞に輝き、ストックホルムでの授賞式に私も招いてくれました。荘厳な式典を鑑賞してもらい、感動しました。（元内閣特別顧問）

